# 十人十色の軍隊

夜神　蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十人十色の軍隊

【Ｎコード】
Ｎ６８９２Ｓ

【作者名】
夜神　蓮

【あらすじ】
ミドルの大きな戦力軍隊「カラー」。
そのカラーに勤めるカロン・エファトは親友二人の気まぐれに付き合わされ苦労している。
そんな、苦労人のカロンが活躍カラー本部。
変人ばかりが集まる軍隊カラー。

## プロローグ（前書き）

カロンです。
徹夜５日目です・・・
今日もあの二人に呼び出されたので、ちょっくら行ってきますわ。

# プロローグ

ここミドルの町の中央には、大きくて国の核になる巨大なカラーという軍がある。
ミドルで唯一の軍であり、警察の役割も果たしている。
ここに入隊するのには大変難しい試験、実践経験、能力などが必要とされる。入隊した時から、国の直属の部下になり、誠意を込めて国民を守るために働く。
この軍隊カラーに入る目的として有力なのは

1「軍隊に入りたくて入った。」

2「制服や銃がかっこよかったから」

3「暇だし、金が欲しいから」

この3つのパターンがある。
俺は1のパターンでここに入った。実践の試験は元々の身体能力がよかった為、難なくクリア。能力はそれなりに評価は得た、入隊試験は難しかったが合格点ぎりぎりで入ることができた。自分頭の悪さを何度ここで呪ったことか。
俺が入った年に受かった人は俺を合わせて5人だけだ。その中に入っている事だけでもうれしいが、俺の親友2人も一緒に入隊することができた事も嬉しかった。
しかし、二人は俺と違い苦労もせず、何でもできてしまう天才なの

だ。
俺はその二人の数歩後ろでいつも二人の背中を見て追いかけるだけ。それが悔しくもないと言えば嘘になるかもしれないが、それが当たり前だと思ってしまえば別にいい。むしろそんなすごい奴と親友でいられると言うことの方が嬉しいし、俺の誇りだ。

カラーに入る奴はだいたいの奴が2のパターンだ。
そして厳しすぎてだいたいの奴はすぐにやめていく。
それを見極めるためにここに入ったばかりの時は一番下で下働きをする。そこでやめずに次々に成績を残す奴だけがちゃんこのカラーに入ることができる。
つまり入隊試験に受かってもまだ仮入隊の状態なのだ。ここに正式に入隊したときに制服や拳銃などが配布され、晴れて本当の軍人となるのだ。
ちなみにあの親友二人は3のパターンだ。

俺がここに入って約2年。
この2年いろいろな戦、内戦、戦争に参加し実績を残してきた。そのおかげで大尉のまで上がることができたが、大尉以上にここ1年上がれないでいる。幾度もの戦いにでてどんな実績を残していてもこれ以上上がれない。理由はだいたい勘づいているがあえて言わないでおこう……

短い黒髪に生まれつきの少し緑かかった瞳に童顔。この瞳の色のせいで何度もいじめられた思い出は今は心の奥底に沈んでいる。そして今もこの童顔のせいで結構苦労している……２４歳にして１６０ｃｍという身長。童顔と低身長のせいで未だに※１セコンダリーに見られる……カラーの制服を着ていても※２ソアラーに見られるという悲しい俺。（※１中学生）（※２高校生）

一緒に入った俺の親友の一人［ジーニアス・ワイズ］。ジーニは、元帥の下にある上級大将まで上った。
そしてもう一人の親友［ブレイン・リラクスト］。佐官のトップの代将になっている。
二人とも戦いにも出ずに机に座って紅茶を飲んでいるだけで大量のお金を入ってくる。それはうらやましいが、俺は無我夢中に働いて手にしたお金の方が価値があると思っているから、別にいい。
命がけの戦いに出て、大量の仕事をこなして手にしたお金はあいつらよりも少ないけど、それがすばらしい事を俺はあいつらに分かって欲しい。でもこれが簡単じゃない……

## 入隊以来の苦労　１－１

「おいジーニ、ブレイン！何で俺の机にお前の仕事が乗ってるんだよ！」

俺は上級大将の部屋の扉を勢いよく足で蹴破ると同時に叫ぶ。大量の資料を両手に持っているため、足で扉を閉めて資料をジーニアスの机に置く。

尉官のフロアにある俺の机の周り、つまり俺のテリトリー。そこには俺が寝れる小さなソファーと、普通の人より少し大きい机がある。そこには毎日のように大量の資料が山のように置かれる。その３分の１は自分のもの、そして後の３分の２は親友のものだ。

親友二人は自らの仕事や面倒ごとは俺のところに送ってくる。朝起きてきていきなり机に通常の三倍の大量の資料が乗ってたらキレたいのも分かってくると思う。

「よぉカロン・エファトどうした？　そんなに怒ったら血圧上がるぞ。」

少し長めで寝癖のついた黒髪に透きとおった黒い瞳のジーニアス。短く切られた栗色の髪に少し茶色のかかった瞳のブレイン。

二人は優雅に紅茶を飲みながら崩しに崩しきった制服を着て座っている。

この二人は暇な時にはよくこうやってティータイムを楽しんでいる。いや、暇じゃなくても、たとえ仕事中だったとしてもこの時間になったらいつもこうやってお茶をしているのだ。

資料を置いて二人を見る。正直、俺はこの二人を見ると虫酸が走る。

俺はなるべく掟、規則、ルールなどはきちんと守る性格で、支給された制服も規則通りに着ている。原則として、軍服の下はＹシャツ、指定されたネクタイ、ネクタイピンは銀色、ベルトは黒で派手でない物、軍靴は黒と決まっている。軍服で開けて良いのは第一ボタンまで、常に銃は携帯していること。のはずなんだが……
この二人はＹシャツでなくＴシャツ、軍服はボタンを止めるどころか全開、ネクタイはかろうじてついているが緩く結んでおり、ベルトにはチェーンなどがジャラジャラつけている。しかも首や腕にアクセサリーをつけている。規則では腕には時計しか認められていないはずだが……
この二人に掟も規則もルールも関係ない、己自身がルールなのだ。

そんな二人はおいしい紅茶を飲んで高級クッキーを食べている。その姿を見て俺は少し苛つきながらもその怒りを抑えて二人を見る。ジーニアスはカップの中身を確認すると俺に向けてつきだし“紅茶おかわり”と当たり前のように俺に要求する。
　こいつらとは小さい頃からの親友とはいえ、軍では上司だ。上からの命令はこいつから直接来ることが多い。上からの命令はたとえこいつからの命令だとしてもＹｅｓと言うのが規則。だか、俺はこういうプライベートの事はきっぱり断る。
　しかし、俺が断るとこいつらはものすごい睨み付けてくる。こいつらは正直言って怖い、見た目とかそう言うのではなくてオーラが怖いからいらつきながらも言うことを聞いてしまう。
俺は部屋の端にある小さなキッチンでお湯を沸かし、その間に紅茶の葉をポットに入れる。お湯が沸くと少しずつコップを温めながら紅茶を入れる。二つのコップを二人の前に置く。“ご苦労様”と言いながら紅茶を一口飲むブレイン、紅茶を口にして笑っているジーニアス通称ジーニ、こいつら二人ジーニとブレインは小等部の頃からの親友だ。と俺は思っているんだが……

ジーニアスについては小さい頃から何でもできた。
勉強にスポーツ、軍事訓練に喧嘩……全てにおいてトップ並みの成績を残してきた。一般に天才と言う奴だ。
みんなには何でも出来過ぎて逆に気味悪がられていたが、俺はそんなジーニに憧れていた。
だが、ジーニは正直言って悪魔、いや魔王と言ってもいいほど性格が悪い。他人を動かすのは得意だが自分が動くのは極端に嫌がる。それに自分に利益の有ること以外はいやでも動かない。人をバレないようにまるでチェスの駒のように使い、自分に利益を持ってこさせる。

ブレインもジーニまでとはいかないが優秀な成績を残している。
しかし、面倒くさい事があると全て他人、主に俺に回すほどのめんどくさがり。しかもかなりの飽き性だ。それにこいつは俺が今までがんばってきた仕事のいいとこ取りをよくしてくる。そして、軽く変態だ。本人はフェミニストだ、と言い張るが俺もジーニも変態だと確信してる。
しかし、この性格なのに女によくモテる。ブレインだけじゃないジーニもよくモテる。だが、ジーニはめんどくさいし、なんで他人に自分の時間を使わなきゃならないと言ってまじめに付き合ったことはないらしい。ブレインは彼女持ち、しかもその彼女にベタぼれ。俺も二人までは言わないし、二人とはモテ方が違うがモテる……はず。二人が言うに“カラーにはショタコンが多いから”らしい。どうせ、童顔ですよ……
しかし、俺は二人の仕事や尻ぬぐいをするのに必死で女に付き合う時間も余裕もない。
それに俺は女に全くと言っていいほど興味が無いし、女は苦手だ。
それを言うといつもブレインに“おまえ男じゃないな”と言われるがそれにも慣れた。

「そんなことより、何でお前らの仕事が俺の机にあるんだ。それになんだこのメモ！　“この仕事今日の5時までに仕上げて持ってきてね。”ってなんだよ！　俺自分の仕事もあるし、まだこの前のお前の仕事の領収書の始末まだやってないんだよ！」

俺はそう言いながら机を強く叩く。叩いたときにおいてあったカップががたんと音を立てて中の紅茶は数滴こぼれる。二人は俺の目を見ていつも当たり前のように言う言葉それは……

「だってめんどくさいんだもん」

二人はそう言って紅茶を一口。こいつら、俺を何だと思ってるんだ……

「めんどくさいじゃねぇだろ！　只でさえ自分の仕事で手一杯なのに！　何だこの量！　俺を殺す気かぁ！」

資料の山を指差しながら猛抗議。徹夜明けの俺にこの量の仕事は殺人行為だ。

「こんな仕事で死ぬほどお前は柔じゃない。大丈夫、俺は信じてる。」

「信じられても困るわぁ！　何だよ、何を信じてるんだ！？　死ぬから、マジで死ぬから！　たまにはお前ら自分の仕事は自分でやれよ！」

息を切らせながらジーニに抗議をしたが、ジーニは全く聞いていな

いかのように窓の外の風景を眺めだした。こうなったらジーニは駄目だ。今までの経験上、こうなったジーニは何を言ったところで全く動かない。
ブレインはため息をつく俺にクッキーを差し出して”まぁ食べなよ”と言って紅茶を飲む。
いらないと言おうとした時俺の腹の虫が鳴いた。そういえば、昨日の夜から何も食べていなかった。

「ほら、食べなよ。ここのクッキー美味しいんだよ～普段お前が食べる安いお菓子とは違うんだよ～お腹空いてるなら、この缶全部食べて良いよ。」

ブレインはそう言って缶ごと俺に差し出す。ちょっとムカついたが、空腹に耐えられず俺はクッキーを掴み口に入れる。確かに美味しい。安いお菓子ては何か違う感じがする。
ある程度クッキーで空腹を満たした。ふぅ～と一息つくと二人がニヤッと笑った。この笑顔、何かを企んでいる顔だ……

「今食べたクッキーが今回の報酬ね。食べたんだから、仕事頼んだよ～」

しまった……空腹に負けてつい食べてしまった……こいつらの目的は俺に仕事を断れない状況を作る事だったんだ……やられた！

「ほら、早くしないと時間が勿体ないよ。俺も元帥に呼ばれてるんだ。」

ジーニは優雅に紅茶を飲みながら微笑んだ。こいつらいつかしばく。
クッキーの粉だらけの口をぬぐい大量の資料を持って部屋から出る。
出る際に思いっきり力を込めて扉を閉める。こんな小さな抵抗しか

出来ない。情けない……

## 入隊以来の苦労　１―２

「エファト大尉。今日は一段と仕事が多いですね。どうしたんですか？」

「これか？ジーニアスとブレインが俺によこした仕事だよ……」

俺はぶつぶつと文句を言いながらもせっせと仕事をする。眼鏡を中指で上げ、ペンを書類に走らせる。俺は目がいいが、こんなに目を使っていたら目が疲れてしょうがないので眼鏡をして視力を落としている。

俺に問いかけてきた少尉は手に持っていた書類を床に落として驚く。俺は落とした書類を拾い上げきちんと整え少尉に渡す。少尉は驚きながら俺に聞く。

「ワイズ上級大将とリラクスト代将をそんな呼び捨てで……そう言えば、あの二人とよく話していますが、仲いいんですか？」

少尉は“ありがとうございます”と言いながら書類を受け取る。俺は少し微笑んでまた仕事に戻る。頭が痛くなるほど小さな文字を読みながら書類を片付けていく。

「あぁ～あいつら？　あいつらとは腐れ縁だよ。小さい頃から仲は良かったけどこんなに人使いが荒い奴だとは思ってなかった……あいつら俺のこと何だと思ってんだよ……」

そう言いながら二人の仕事の最後の書類にハンコを押して疲れた目を休めるために眼鏡を取る。やっと終わったぁ～あと自分の仕事だ

けだ……
その瞬間、俺の横から聞き覚えのある声がした。
「そりゃ親友だと思ってるよ。でも今はちょうどいい玩具かな～」
聞き覚えのあるその少し笑ったような声はブレインだった。
ブレインはまるでホストの着ているようなシャツに軍服を肩だけ羽織りネックレスや指輪をチャラチャラさせた格好で俺をにこやかに見下ろしている。その横には崩しきった軍服で大きなあくびをしたジーニが立っていた。
俺は二人を無視して眼鏡をかけ直し、やっとたどり着いた自分の仕事に進める。
俺のいるフロアの奴らはみんな頭を下げてじっとしている。そりゃそうか、軍の上層部の奴らがこんなところに来ているんだから。だが、俺は黙々と仕事をすする。
「何だよ玩具って……お前らのせいで俺ここ2・3日寝てないんだぜ。今日は仕事がやっと片付けられそうだったから寝れるっと思って喜んでたところだったのによ……俺の睡眠時間返せ。」
俺はそう言いながらも机の中に入っているチョコレートと口に銜えてペンを走らせる。
耳を傾けながらもペンを走らせるのは止めない、より多く仕事をこなすためのコツだ。
「お前にいい知らせを持ってきたぞ。もうこの仕事はしなくてもいい。そこら辺の少尉とかに任せておけ。今日はもう休んでいいぞ。」
ジーニアスからその言葉を聞いて俺は口からチョコレートを落としてしまう。

こいつらに今まで休めなんて言われたことは数えられるほどしかない。それに仕事をしなくていいって……どういう事だ。俺は落ちたチョコレートを食べて“どういうことだ”と少し睨み付けて聞く。

「やだな～そんな怖い顔しなくたっていいのに。俺は2、3日寝てないお前の体が心配だから言ってあげてるのに～」

ブレインはそう言いながら俺の机にある仕事の山をさっき話していた少尉に渡す。少尉は急いで自分の机に戻る。俺は少尉に同情をしながらもブレインに呟く。

「嘘だろ。」

こいつらが俺の体を心配するなら、こんなに大量の仕事寄こさない。さっき言ったとおり、こいつらは俺を玩具としか思ってないのだから。

「やっぱ、ばれた？　さっき元帥から指令が入ってな。ここでは話せないから全ては俺の部屋で話すから来い。」

ジーニはそう言って俺の襟を持ってフロアから出て行く。俺は手にチョコレートを持ったままフロアから引きずり出されていく感じになった。その後にブレインがついてくる。

　ブレインは１８２ｃｍと、身長がとっても高く腕や足も長い。だが筋肉質って言うより単に細い。ジーニアスはブレインよりは低いが１７０ｃｍ後半とそれなりの身長はある。

しかし俺は平均身長より１０ｃｍ近く低い。ジーニアスの調査だと、軍隊の中の男で一番背が小さいという絶望的な調査報告をしてくれた。それにプラスして、童顔で未だに中学生でも通るほど幼い外見なのだ……

これはコンプレックスだが、前向きに考えると長所だと思う。戦場に出てでかかったら目立ってしょうがない。小さいからこそ相手に自分の存在を知られずにしとめる事ができる。その面では俺は強みだった。みんなにそれを言うと“負け惜しみ？”と言われるが、断じて違う。

ジーニアスの部屋に着き襟元から手が離される。絞まった首を手でさすりながらも目は二人から離さないでいる。手に持っていたチョコレートを口にしながら二人に向かって眼をとばす。

「そんな怖い顔しなくても大丈夫、すぐ終わるから。まずおまえに言わなきゃならない事が2つある。一つ目、明日の内戦におまえも参加してもらうことになった。しかも、おまえだけ単独行動を取ってもいいという命令が出た、よかったな。」

俺はまたしても口にくわえていたチョコレートを落としてしまった。明日出る内戦は俺のような下級の奴らが出れるような軽い戦いではない。

国からの直接の命令で大佐以上の人たちが出る大きな内戦、この内戦にここカラーも全力をあげている。それはこの軍全員が知っている常識。その内戦に俺が出る……しかも滅多に出ない単独行動の許可……

あり得ない。確かに大尉の称号でいる割に戦闘能力は高い方だが、そんなの上の奴らが俺の事を知っているわけがない。たとえ知っていても俺なんかを内戦に出すわけがない……っと言うことはまあこいつらの悪戯か？

「おまえ今、俺をだまそうとしてるな。って考えてただろ……残念

でした～これは本当だ。許可書もここにある。元帥がいうに、カロンの戦闘能力はこの軍で二位らしい。今までの戦闘経験やおまえの戦闘スタイルから元帥はお前にこの内戦を任せたんだってよ。あっついでに一位は俺ね。」

ジーニアスは許可書を俺の前に放り投げた後、親指を自分の方向けて静かに笑った。

確かに俺は階級は下の方だが、戦いとなったら誰にも負ける気はしない。

今まで誰よりも多くの戦闘経験を積んできたし、俺は山で産まれ山で育った。身体能力と五感には少しばかり自信があるし、小等部の頃に習った剣術も今ではジーニアスにも勝てるほどの腕になった。山で育ったおかげでサバイバルにも強くなったし、父親の教えてくれた事は今でも本能的に覚えている。中等部で初めて拳銃の操作を習った銃も得意だ。「ＳＩＧ　ＳＡＵＥＲ　Ｐ２６６」（シグ・サウエル）の銃を愛用としている。火縄銃のようなのは山の狩で使った事があったが、ハンドガンは中等部で初めて使った。

しかし、目のいい俺は命中力もあって、山を駆け回っていたから体も鍛えられていて跳ね飛ばされる心配もなかった。今も常にシグ・サウエルを携帯している。

「っで。二つ目、これは大切だからよく聞けよ・・・」

珍しくジーニアスが真剣な目で俺を見てきたので俺も心構えをしてジーニアスの言葉を待った。

「……紅茶入れてくれ。のどがカラカラだ。」

俺はその言葉を聞いた瞬間、腰にいつも待機されているシグ・サウ

エルをホルスターから抜きジーニアスの額に押しつけ、安全装置を外す。ジーニアスも少しびっくりしたが動じることなくこっちを見ている。正直、銃を抜き戦闘態勢に入るのは俺はジーニアスより上。早抜きならお手の物だ。こいつこんな近くに銃口があるのに動きもしない。完全に見切ってやがる……

「おまえはそんなことのために俺を呼んだのか？　紅茶ぐらい自分で入れろ。」

「嘘だよ、嘘。ったくカロンは冗談が通じないんだから。紅茶を入れたら本当に話すから、紅茶を三人分入れてくれ。」

シグ・サウエルを腰のホルスターに戻し、部屋の小さな台所へ向かう。その間にブレインは丸い机とクッキーの缶を用意していたが、ジーニアスは一歩もその場を動かなかった。
紅茶が入り二人分の紅茶を目の前に出し俺は机にもたれかかるようにして立って話を聞く。ジーニアスは“おまえのは？”と聞いてきたが、俺は俺用のマグカップにコーヒーを入れて飲む。俺は紅茶よりコーヒー派なんでね……

「よし、お茶会の準備もできたしそろそろ二つ目の話をするか。」

コーヒーのマグカップを口から離し、ジーニアスの言葉に耳を傾ける。また冗談みたいなことを言ったら次はこのコーヒーをぶっかけてやる。

「二つ目の内容は、十日後つまり内戦が終わってからの軍事会議におまえも出てもらう事になった。これは特別だが、元帥がいうのだからしょうがない。」

俺の思考回路は一時停止。そして巻き戻し。グンジカイギ……
おい、それってカラーのトップの奴らが出るカラーのこの先を決める大事な会議のことだろ……なんで俺なんかが？　おかしいだろ。でもジーニアスは至って本気っていう顔をしてるし。これは冗談じゃないようだ。

「まっ、待てよ！　何で俺みたいな大尉にその会議に出れるんだ！？」

ジーニアスはう～んと少し考えている。しかしジーニアスの口から答えが出るより先にブレインの口が動いた。

「お前、今までにどれだけの戦場に出てきたか知ってるか？　普通の人は2年で約３０程度が限度だ。それ以外は断っている。死にたくないし、戦場で酷いのを見るのも、酷いことをするのも嫌だからな。
でもおまえは１００を超えている。たった2年で１００以上の戦場に出ることのできるような奴は、人が死ぬのを見ていて楽しい奴か、単にまじめな奴か、国民の為の事を思っている奴かしかいないって、元帥は言ってた。っでおまえは国民の事を思って戦ってるっと思われている。だから元帥に気に入られて戦場に出たお前の意見が聞きたいらしいだな、きっと。」

　もうそんなになったのか……
確かに戦場に出るのはいやだ。俺みたいな人間が尊い命を消すことになるのは辛いし、精神的にも肉体的にもきつい仕事だ。しかし、この戦いに勝てばびくびくしながら暮らす国民の人たちは解放され、自由になる。
そう思うと、戦場の酷たらしさも耐えることができる。だから俺は出された命令には従い、出された通りに仕事をこなす。

「だからおまえは内戦が終わりしだい俺のところに来い。まぁ内戦で死んでたらそれもできないがな。」

冗談交じりでジーニアスは言うが、常に死と隣り合わせの俺はそれもあり得るかもしれない。分からないことは笑ってごまかせ、どこかの本に書いてあった事を思い出し小さく微笑む。

## 入隊以来の苦労　１－３

カラーには寮があり、だいたいの奴らはそこで寝泊まりをする。俺もそうだが滅多にここに帰ってくることは無い。なぜならあの二人のよこしてきた仕事が一日では終わらないからだ。終わらないときは徹夜をして終わらせ後ろにあるソファーで寝る。
現にこの前帰ったのは４日前になる。部屋の鍵を開けて入ると埃が舞い、腕で顔を覆うが煙たかった。

（これは掃除がいりそうだな……）

まだ寝るには時間があるし、埃だけでもはたいておこう。頭にバンダナとマスクをしてほうきとはたきをもって掃除を始める。
俺の部屋はみんなに殺風景と言われるほど必要以外のものは何一つ無い。勉強する為の机、寝る為のベット、本や資料を収納する為の棚、以上だ。これ以上に何一ついらないし、欲しくない。
　部屋の棚とベッドの掃除が終わり、机の掃除に入る。ペン立てと少しの本をどかし濡れ雑巾で拭く。最後に写真立てをきれいに拭いて終わり。机にものを戻して写真立てを置く。バンダナとマスクを外し洗濯籠に投げ捨て、ベッドに倒れ込む。

写真立ての中には小さい頃の俺と若い両親が仲良く写っている三人は笑顔で楽しそうだ。これが三人で取った最後の写真……
この後、俺が６歳の時に父が重い病気に罹り、ほんの数ヶ月で他界してしまった。泣き崩れる母を見て俺は何もできなかった、無力な自分に絶望していた。俺に力があったら……そんなことばかり思っていた。

「俺が…俺が母さんを守るから……だからもう泣かないで……」

冷たくなった父が横たわるベッドにしがみついて泣いている母親を見た時、俺はそう誓った。幼いながらに母を守ろうと必死で働いた。父に言われたことを守り、父が残していった山で必死に働いた。母もそんな俺を見て少しずつ立ち直っていってくれた。それを見ていた俺は嬉しかった。

父の遺していった財産もあったおかげでやっと貧しいながらも普通の暮らしができるようになった。小さくてすきま風や雨漏りなんてふつうにあるこの小さな山小屋で暮らすのは大変だったが、母と二人で暮らしていたから楽しかった。

そんなある日、母は俺に下町の軍事学校に入っておいで、と言ってくれた。

軍事基地に入れるのは嬉しかった。昔から憧れていたし、父が昔勤めていた軍隊に入ることのできるルートだから。しかし、軍事学校に入るにはお金もかかるし何より働けなくなる。そうなると今以上に生活が厳しくなってしまう。俺のせいで母さんがしんどい思いをするのはいやだ。

だから俺は母の言うことに首を横に振って“俺はこのままでいいんだ”と母に伝える。しかし母は何度も何度も同じ事を繰り返した、“母さんのせいであなたの将来を潰したくない、お願いだから行ってくれ。”

母の押しに負けて軍事学校にふつうの人より2ヶ月遅れて入った。軍事学校に入ってから俺は必死に勉強した。母が与えてくれたこの希望を無駄にしないように必死に勉強をし、勉強の合間に働いた。俺が卒業試験に合格し、もっと勉強するため奨学金で大学に通うことになった。大学の合格をいち早くに母に伝える。母はそれを聞いて涙を流して喜んでくれた。その涙は今も忘れることができない。

今、母は元気なのだろうか……

そんなことを思いながら、静かに重たい瞼が降りる。

きっちり5時に目覚まし時計が鳴り響きその音で目を覚まし、目覚まし時計を止めて大きく伸びをする。何日も寝ていなかったからか、今日はとっても体が軽い。
体を起こして棚からバスタオルと着替えを持ってシャワールームに入る。熱いシャワーを体に当てながら精神統一。戦いに出る前はいつもこうやって心を無にする。無関心になれば戦いもつらくない。
シャワーを終え、アンダーシャツの上に防弾チョッキを着てその上にワイシャツを着て軍服を羽織る。これも掟通りすべてきっちりする。腰にホルスターをつけそこにシグ・サウエルを装着し、昔父にもらった長刀を腰にぶら下げ、手袋をはめ部屋の扉の前に立ち部屋の中を見渡す。
もうこの部屋に帰って来れないかもしれない……そう思うとこの部屋とも最後の別れになるかもしれない。そして静かに部屋の扉を閉め鍵を閉める。鍵を閉める音がこの部屋ではとても大きく響いた。

ポケットに手を突っ込みながら廊下を歩く。すれ違う人皆が俺に向かって頭を下げる。
こうやって目的も無く歩いているといろいろな情報と噂が耳に飛び込んでくる。暇な時はよくこうやって情報収集をする。
今日はカロンが戦場に出る日、こういう日はたいてい愚痴や嫌みが廊下に飛び交う。その噂を聞くためにめんどくさいが軍内を歩き回る。
そんな事を思いながら歩いていると、いきなり飛び込んできた情報は聞き覚えのあるものだった。

『また“冥界の船頭”が内戦に出るんだってさぁ。』

『エファト大尉だろ？　怖ぇな……』

冥界の船頭？　何だそれ……二つ名にしてはあんまりじゃないか？
　カロンはそんな悪い二つ名をつけられるような奴じゃ無いんだが……
俺はとりあえずその噂をしている二人組ににこやかに近づく。
「ちょっとそこの君たち～さっき話してた“冥界の船頭”って何のことだか詳しく話してくれるかい？」
俺がいきなり現れたので二人組はものすごくびっくりし敬礼をする。
俺はそのままでいいという気持ちを込めて手を前に出す。
「リラクスト代将……いやその……エファト大尉はこれまでに普通の人とは思えないほどの戦いに出ています。
エファト大尉の名前のカロンがギリシャ神話の冥界の船頭役のカロンと同じなのと、戦場で大勢の人をあの世に送っていることから“冥界の船頭”という二つ名がついたと思われます。」
敬礼をしたまま二人のうちの一人が話す。
冥界の船頭か……確かにあっていると言ったらあっている。戦場で敵をあの世へ導いてやるのがあいつの仕事だ。だが、そんな悪いような二つ名は止めてやって欲しい。
そう思っていたその時、俺の横を真剣な顔でカロンが通り過ぎて行った。
俺は二人にありがとうと言ってから、カロンの後を小走りで追う。
“おい、カロン”そう言いながらカロンの肩を掴むと、いつの間にか俺の眉間に拳銃が突きつけられていた。
拳銃を抜く動きも俺の眉間にそれを突きつける動きも速すぎて見えなかった。拳銃の先に見える瞳は獣のような目をして何かに脅えているように小刻みに震えていたいた。

その瞬間俺と廊下の雰囲気が凍り付いたが、カロンは俺の顔を見て目に光が戻った。

「何だブレインか、いきなり肩掴むからびっくりするだろ。」

そう言って拳銃をホルスターにしまい、右手で頬を少し掻いてから無理矢理の笑顔を作った。

こいつは戦いの前になるといつもこうやって殺気と神経を体の端まで行き渡らる。普段は隙だらけなのに戦いの前になると隙が全く無くなる。そのまま何も言わずにカロンは俺の前から去っていった。

手の震えがまだ止まらない。

猟では常に神経をとがらせておかなければならない、これは父から教わった事だ。

猟と戦場は一緒にしたくないが父に教わったことは今までに俺の命を何回も救ってくれた。戦いに行く前にいつも父の言葉を頭の中で何度も繰り返す、そうするとピンチの時、父が助けてくれそうな気がするからだ。

腕時計の文字盤を見て空を見上げる。綺麗な秋空だ。

「エファト大尉、そろそろ連合軍がこちらに来ると推測される時間です。」

無線機から声が聞こえる。小さく“了解”と答えると戦闘の邪魔にならないように無線を切る。さて動くか……

## 内戦　2－1（前書き）

今回、カロン君がボロボロになります……
残酷な描写ありです……

## 内戦　2―1

南からの風が紅茶のポットから出る何ともいい匂いが流してくれる。いつものようにおいしい紅茶を飲みながら、窓から見える煙をただただ見つめる。

（いつも通り、すぐ帰ってくるよな……）

いい匂い部屋に広がる度に不安も心に広がる……
いつもあいつは何事も無かったかのように笑顔で帰ってくる。
あいつはどんなに嫌なことがあっても俺たちに言わない。俺たちが迷惑するとでも思っているのか分からないが、こっちもこっちであいつの事を心配している。
もし戦いで……怪我ではすまなくて死んでしまったら……カロンが戦いに出ている時はいつもそんな不安に襲われる。

（早く帰ってこいバカカロン……）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

死臭と爆弾の火薬の臭いが鼻を刺す。内戦が始まってそろそろ1時間が経つがまだこちらに相手軍は来ない。岩の後ろに隠れて時計の秒針をただ意味もなく見つめる。
その時、俺のすぐ後ろに爆発音がした。

（来たか……）

横目に岩から後ろを覗くと馬鹿でかい戦車と戦士がぞろぞろと歩いている。
戦車が一台、戦士は見たところ１００人を超えているだろう。
俺は単独行動だから俺の姿は見えていないのだろう。不意打ちはあまり好まないが、勝つためだ仕方がない……
俺は腰に装着してある拳銃をホルスターから抜き岩の間から狙う。
しかし、数が多い……ここで一人一人狙っていたら確実に俺の居場所が分かってしまう。
それなら……腰のベルトからぶら下がる長刀を抜き地面を蹴り軍隊目指して飛ぶ。
飛んで着地した先は群がる戦士の真ん中。いきなり敵が自分たちの真ん中に現れたら一瞬どうすればいいか分からなくなる。そんなことお構いなしに俺は長刀を横に振る。腰から上下に切り裂かれた戦士は武器を構える前に血を吹き出しながら崩れ落ちる。
俺は頭から降りかかる大量の血を舐め、次々へ戦士を切り裂いていく。戦士は全て消えた。残ったのは馬鹿でかい戦車の中にいる人間のみ。俺は戦車の上についている防弾ガラスをジャンプの勢いで割り、中に腕だけつっこみ銃を乱射する。防弾ガラスに飛び散る赤い体液の量から中にいたのは恐らく3人、しかしその3人はもう、藻くずと同じだ。口の周りについた返り血を舌で舐め、長刀を振り切った際に着いた血を振り落とし鞘に戻す。
これで一つの部隊は消滅した。後どれだけの人を殺せばこの内戦は終わるのだろうか……手に残った嫌な感覚を握りしめ戦車の上から降りる。

それからどれだけの時間がたっただろうか。エファト大尉の補佐として戦場に出たが、エファト大尉は補佐なんかいらない……ものの１分もかからない間にどの部隊も消滅させてしまう。

岩の影からのぞくグレイ少尉はその姿を見て体が動かせないでいた。いつもコツコツと仕事をこなし、自分が話しかけたら笑顔で答えてくれる優しくてまじめなエファト大尉じゃない……殺気がこっちにまでしみてくる。その時、大尉は後ろを向いたまま、

「グレイ少尉、そこにいるんだろ。こっちに出てこいよ。」

そう言われて正直心の底からびっくりした。岩の影から静かに出て、大尉の前までゆっくり歩き止まる。僕が来た時にこっちを向いた、その顔はいつもの笑顔ではなく表情は無い、返り血で余計に怖く感じた。

「少尉は覗き見が趣味か？　バレバレの追跡だったな、もうちょっと練習した方がいいんじゃないか？」

さっきと変わらない表情で淡々としゃべる大尉は手に持っていた長刀を振り鞘に戻す。

「大尉、自分は大尉の護衛と言われて来たのですが、どうすればいいのでしょうか……」

エファト大尉は綺麗な秋空にかかる大量の煙を見上げてから小さくため息をしてから、自分の方に向き直した。

「少尉はさっきみたいに下手な追跡で俺の後ろで待機してくれればいい。俺のやることをただ見てるだけでいい。でも銃は常に使えるようにしておいてくれ。それと俺を見ないで俺の周りにスナイパーがいないか見てくれ。俺遠距離はあまり得意じゃないから。」

大尉はそう言ってまた少し大股で歩き始めた。その姿はたくましく

も見えたが怖くもあった。このままどこへ行くのか、これからどうするのかも分からないまま黙々と歩いていく大尉の背中を見て、自分はエファト大尉の後を小走りで追った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内戦がすぐに終決した。
カラーの部隊の一人が相手の大将を倒したのが終決した理由だった。
内戦が終わってカラーの兵隊がぞろぞろ列をつくって帰ってきた。
窓からその様子を見ながら一人の男の存在を探す。胸騒ぎがする。
あいつは帰ってきてるのか？

「きっと相手の大将倒したのカロンだよ。」

声のした方を向くと扉にもたれかかったブレインがにこやかな笑顔をしてこっちを見ていた。
いつもこいつはいつどこでどう出てくるか分からない。いつもフラフラしていて、型にはまらない奴の行動は到底読めそうにもない。
倒したのがカロンと言うのは俺もそう思う。そう思うけど、この胸騒ぎがおさまらない……
　紅茶の香りが部屋に漂う。机の上の書類を見るが頭に入らない。
何で来ない？　いつもなら笑顔であの扉から“よう”っと言って入ってくるはずなのに……いつもより遅い。ブレインを見ると机に頬杖をして人差し指で机を叩いている、この行動を見せるのは不安な時か苛ついているときだ。
その時、部屋の扉が大きく開く。扉が開いた瞬間、俺とブレインは扉に視線を向ける。来た……？

「ワイズ上級大将、リラクスト代将。負傷者リストと死亡者リストを持ってきました。確認をお願いします。」

入ってきたのは書類を持ってきた伍長だった。二人は伍長を見つめながら静かに椅子に座り直す。

「伍長、カロン・エファト大尉の今どこにいるか知っているか？」

ブレインは扉から出て行こうとする伍長にそう聞く。伍長は目を大きく開き一時停止。

俺とブレインはその動きの止まった伍長を見ながら伍長が動き出すのを待つ。伍長は一つ咳払いをするときちんとした姿勢してこちらをむき直す。

「お二人はご存じでないのですか？　エファト大尉の事。」

伍長は改まってそう呟いた。カロンのことを知らない？　やっぱりあいつに何かあったのか……怪我でもしたのか？　珍しい、あいつはこれまで戦いで怪我という怪我はあまりしなかった。するとしても少しの切り傷や打撲程度大怪我などしなかった、してもいつも無理矢理退院していた。だからいつも少しの包帯を巻いてこの部屋に入って来る。病院では脱走常習犯だ。

そう言えば、前回医者が次怪我したら治るまで医務室のベッドにくくりつけておくって言ってたな……

「ベッドにくくりつけられてんのか？」

冗談半分で言うと、伍長は首を大きく横に振り、負傷者リストの一枚を俺達の前につきだした。

その書類をよく見ると真ん中のほうに見覚えのある名前が書き込まれていた。

「違います。カロン・エファト大尉は意識不明の重態で今医務室の集中治療室で治療を受けています。」

イシキフメイノジュウタイ？

頭が真っ白になった。カロンが？　あいつが怪我なんてするわけがない。したって軽傷で済むはずだ。今までだって、ずっとそうだった……なんで重態なんて……

そう思ったときにブレインは椅子から立ち上がり伍長を押しのけて扉から出て行った。一歩遅れて俺も部屋から出て医務室に向かう。あいつが……あいつが死ぬわけない……そう思いながらも足が速くなる。

勢いよく医務室の扉を開けると看護婦さん達が迷惑そうな顔をしてこっちに視線を向ける。

しかしそんなことどうでもいい、カロンはどこにいる？　集中治療室ってどこだ？　内戦が終わったばかりで負傷した戦士のうめき声やすすり泣く声が医務室中に響いていた。

「看護婦長、カロン・エファト大尉はどこにいますか？」

ブレインは怪我人を見ている看護婦長に話しかける。

婦長はブレインを一度見て、すぐに怪我人の包帯を巻き、巻き終わると他の看護婦に怪我人を任せると“こちらです”と言いながら奥の部屋までゆっくり歩く。俺とブレインは看護婦長の後を追い、看護婦長の歩幅に合わせて歩く。もっと速く歩いて欲しかったが、看護婦長さんのペースに合わすしかなかった。

婦長は静かな廊下を歩き、廊下の先にガラス越しに見ることができる集中治療室があった。その前においてある長椅子には一人の男が

軍服を毛布にして丸くなって寝ていた。

「カロン・エファト大尉はこちらで治療中です。お静かにお願いします。」

婦長はそう言って部屋の方を指さし一礼した。俺とブレインは急いでガラスにへばりつくようにして部屋の中を見る。

一瞬二人は絶句した。

そこには想像していた以上に傷だらけで、包帯だらけで腕や体にたくさんの管をつなぎ、酸素マスクで小さな息をするカロンが横たわっていた。

心電図の波はふつうの人より小さく弱々しかった。何でこいつがこんな怪我をしているのか……

こいつのこんな姿、見たくない……

「婦長さんこいつの様態は？」

ブレインはガラスの向こうにいるカロンから目を離さずに婦長に尋ねた。ブレインの目を見てみると不安を隠しきれずに泳いでいた。

「傷が深く、銃で撃たれた傷が多いです。しかも、銃弾の一つが心臓近くまで達しています。意識が戻らないと何ともいえませんが、普通の人なら命を落としています。」

婦長はそう言って静かに一礼し静かにまた廊下を歩いていった。カロン……何でこんな事になってんだよ。あの内戦でお前に何があったんだよ……

「ワイズ上級大将、リラクスト代将。エファト大尉からの伝言をお

伝えします。」

その声が聞こえ、声のする方を向くとさっきまで椅子で寝ていたグレイ・アニスト少尉が真っ赤に腫らした目でこっちらに向かって敬礼をしていた。グレイ少尉はずっとカロンについていたから何か知っているかも……それに伝言って……遺言？

「エファト大尉は意識を失う直前に“ジーニ、ブレイン。終わったら一緒に飯行こう”っと言っておりました。」

この伝言から分かることが一つ。こいつは俺たちが思っているほど死ぬつもりはないらしい。本当に馬鹿げた伝言だ。そう思うと笑えてくる。

「伝言は分かった。それよりあの内戦でこいつに何があった。」

ブレインはグレイ少尉に尋ねる。どんなにひどい内戦だったからってカロンがこんなになるには何か理由があるはずなのだ・・・

「そうですね。大尉には口止めされていたんですが、自分は話した方がいいと思いますので、お話しします。自分は大尉に命令されてからずっと大尉の後ろで護衛をしていました。建物の上にいるスナイパーなどを打ち落としていました・・・」

## 内戦　２－２

高いとは言えない建物の上にスナイパーは潜んでいる。
相手には見えないと思って安心しきっているスナイパーは簡単に撃つことができる。それに自分は自慢ではないが視力が４．０ある。スコープなんか無くても離れたところから相手の居場所が分かる。
大尉もそれを知っていてこの内戦に自分を護衛に頼んだのだろう・・・
正直大尉は護衛なんかいらない。遠距離戦苦手と言っても常にシグ・サウエルは使える状態になっているから、有効射程圏内に入っていればすぐに打ち落とすことは可能。
もう、かれこれ３０分が経ったが、この３０分で大尉は１５あまりの部隊を倒してきた。部隊を消してまた、ゆっくり戦場を歩いていく。
その時、大きな大砲の音が戦場に鳴り響く。
岩の影から大尉の方を見ると大尉前にはふつうの部隊の５倍ほどの部隊が大尉に向かって進んできている。
この距離だとこちらの攻撃は届かないが、あの戦車についている馬鹿でかい大砲ならこちらに余裕で届く。
大尉はとっさに自分の隠れている大きな岩に飛び込んできた。無表情のまま部隊を見つめながら荒れた息を整えていた。その部隊は無駄に弾を乱射していることから、恐らくこちらの位置はばれている。こういう乱射の時は相手の弾切れになるのを待つものと教えられた。マニュアル通りに行動するエファト大尉はマニュアル通りに相手の弾切れを待っていた。
しかし、数とライフルの性能がいいからかなかなか弾切れにもならず打ち続けている。
その時、視界の隅に一つの動く影。

この町の逃げ遅れ、親とはぐれた幼い子供で泣きながら戦場を歩いていた。そのまま歩いていったら、銃弾の雨の中に入ってしまう。自分が動こうとしたその時にはもうエファト大尉の姿はなく鉄の雨の中、子供に向かって走っていた。ろくな防具も着けずに鉄の雨の中へと突っ込んでいったカロン大尉を見てから、とっさに自分は持っている銃で大尉に向かって打っている相手軍の人間を撃つ。しかし、人数が多すぎてなかなか消すことができない。
大尉はこの銃弾の嵐の中を走ってその子供を抱きかかえ地面に伏せた。地面に伏せた後、軍服に大量の血の赤色が広がるのが分かった。見ただけでも4カ所はある。
大尉は子供を岩の影に隠してから、先ほどと同じ無表情で長刀を抜き軍隊に向かって走り、いつもより少し遅いが巨大な軍隊を消滅させた。軍服から血が滴りながらこちらに戻ってくる大尉は顔を歪ませ、とても苦しそうだった。

「大尉！　大丈夫ですか！？　すぐに手当てを……」

大尉に近寄り、傷を見せるよう言う。だが、大尉は自分の手を払い、

「少尉、俺は少尉に“俺のやることを見てるだけでいい”っと言っただろ。」

っと言って、手で傷口を押さえながらゆっくりと子供の所へ歩いていく。岩にもたれかかって泣いている子供の前にしゃがみ涙をぬぐってあげ、“どうしたんだ？”と問う。子供は涙を手でぬぐいながら大尉を見つめて話し出した。

「あのね、お母さんとね……離れちゃったの……西の安全地に逃げるってお母さんのと約束したの……」

セミロングの黒髪に、瞳の大きな端整な顔立ちで少年か少女か分からなかったが、声の感じから少女だと分かった。
少女の母親が今生きているかは分からないが、少女をこれからどうするか大尉の行動をよく見ておくことにした。
少女の事情を聞くと大尉は少女の頭を撫でて少女を抱き上げ、ゆっくり歩き出した。歩く度に血が地面に滴る。
大尉は少女を抱きかかえながら戦場を歩いていると、またしても相手軍の部隊が大尉にめがけて発砲。
だが、距離が距離。大尉にはそんな発砲は打ち落とすことぐらいできる。
しかし、閃光が大尉の腹部に貫くのが見えた。

「大尉！！」

大尉は一度よろめいたが、すぐに体制を整えまたゆっくり歩き出した。子供に弾丸が当たらないようにしっかり抱いている為長刀を抜くことが出来ないのだ……必死に痛みに痛み大尉。自分は何をやってるんだ……
自分はすぐに応戦に入る。だが、先ほどと同様、数が多すぎて対応しきれない。何発も大尉の体に弾が当たる中、自分は少ない数の人を倒すことしかできない・・・
その自分の無力さに失望した。部隊をまくことができた頃には大尉の体はボロボロになっていた。血の後が生々しく戦場に残りながらも必死に歩く大尉を後ろから追う。
だいぶ歩いてから大尉が向かってる場所が分かった。“西の安全地”だ。そこにあの少女を連れて行っているのだ。大尉……やっぱり大尉は優しい人だ。

地下に頑丈な扉を付けた小さなスペースを作った場所、それが安

全地だ。
安全地には多くの人がそこでこの醜い内戦が終わるのを願いながら待っている。その安全地でこの少女の母親も娘を捜しながら待っている事を願う。
大尉はもう歩けるような体じゃないにも関わらず、ずっとその少女を抱いてここまで歩いてきた。西の安全地の入り口を力ない腕で開ける。そこにはたくさんの女子供が安全地の中で震えて待っていた。

「あの……この女の子の母親はここにいますか？　この子が探してますよ……」

大尉はそういって抱いていた少女を地面におろす。少女は大尉にしがみつきながらもきょろきょろと周りを見渡し母親を捜す。大尉は苦しそうな息遣いをしながら少女の頭を撫でる

「ハーネス！　生きてた、よかった……探したのよ……」

安全地の中から一人の女性が飛び出てきてハーネスと呼ばれた少女に抱きつき涙を流す。その様子から母親だと思われる女性に抱きつく泣きじゃくるハーネスを大尉は静かな笑顔で見ていた。大尉は立ち上がりさっさとこの場を立ち去ろうと歩き出した。自分は大尉の数歩後を追う。その時、

「あの……娘を助けてくれてありがとうございました。本当になんとお礼を言えばいいか……」

母親は何度も頭を下げる。大尉はそんな姿を見ながら何も言わずに頭を下げてまたしても戦場に戻っていった。大尉はお礼や褒め言葉を言われると照れて逆に態度が悪くなると、この前代将が言っていたことを思い出した。歩いて行く大尉を見ながらハーネスは自分の

ところに走ってきて、自分の足にしがみついた。

「あのお兄ちゃん、お名前なんて言うの？私はハーネスって言うの、お兄ちゃんにありがとうって言っておいてね。」

ハーネスは泣きはらした目でにこっと笑った。自分は“カロン・エファト大尉だよ”っといい、ハーネスの頭を撫でてゆっくり歩く大尉の後を追い、大尉に先ほどハーネスの言ったことを伝える。すると、

「そうか、よかったな。」

まるで他人事だ……自分がやったすばらしい事のすごさ分かっていない。銃に撃たれ、深手を負いながらも子供を守りぬき母親の元に返した心優しい人だ。しかし、この傷で今からどこへ向かうというのか……大きな大砲を食らった腹部は大きな風穴が空き、十数カ所に拳銃の弾が当たり大量の血が体から溢れ出ている。こんな傷では一つの部隊を消滅するのも難しい。それなのに大尉はどこかへ向かって歩き続けている……

「大尉……どこへ向かうのですか。速く手当をしないと大尉の体が……」

「少尉もしつこいな……俺は“俺のやることを見てるだけでいい”って言ったろ。だから、お前は俺の後ろで見ていればいい。もうすぐこんなくだらない内戦終わらせてやるから。」

大尉はそう言って、そのボロボロの体でまたゆっくりと歩いていった。そしてまた自分は大尉の後ろで見ていることしかできない。

## 内戦　2―3

時期、大尉は相手軍の大将の部隊にたどり着いた。
やはり大将の部隊となると、今までの部隊とは桁違いの大きさだ。
隠れて遠距離から銃殺して数を減らしてから突入した方がいい。
しかし、大尉はさっきと変わらないスピードでゆっくりと部隊に向かって歩いていく。大尉は何を考えているのか、自分には全く分からない。
その時、一瞬で部隊の半分が一気に倒れた。倒れた死体は腹部の辺りで真っ二つに切られている。この切り口、見たことある……ふと横を見れば、さっきまで近くにいた大尉の姿は近くにおらず、部隊の中心で長刀の剣先を見て立っていた。

「やっぱりこの傷だと力が出し切れないな……でも、何とかなりそうだ……」

大尉はそう言いながら長刀を肩に構え斬りかかった、その時戦車が火を噴いて爆発した。
その長刀で巨大な戦車を切ったのだ。戦車の爆発に巻き込まれた戦士を含めて約半分が死んだ……自分も大尉を狙うスナイパーを狙って援護する。数分後大尉の周りにいた人は全て消えた。いつのは敵の大将と十数人の戦士。
大尉はゆっくりと大将に近づいていく。その大尉の姿とさっき溢れる目に戦士は少しビビリながら後退。エファト大尉は長刀を振りかざしながらゆっくり大将に無表情のまま近づく。血だらけで長刀を持った冥界の船頭が近づいてきているのだ無理もない。

「何をやっている。速くそいつを殺せ！　俺を守れ！」

大将は脅えながら戦士達に無茶苦茶な命令を出す。戦士達もどうしたらいいのか分からずに大将の顔を見る。
大将の言葉を聞いた瞬間、大尉は大将の後ろに回り喉元に長刀を当てる。戦士達もとっさに銃口を大尉に向けるが、大尉がシグ・サウエルを向く方が速く、さっきまで立っていた戦士は左胸から血を出し、膝を折って倒れた。
後は大将を討つだけで、このくだらない内戦が終わる。自分も安心して持っていた銃をおろしその時を待つ。
　その時、大尉の腹部から赤い液体が吹き出し、口から血を吐き長刀を持っていた手に力がなくなった。大将は体に暗器を隠しており、その暗器が大尉の腹部に刺さったのだ。とっさに急所を外したからとはいえ、元々の怪我にこの一撃は効いた。大尉は地面に膝をつけ、手で腹部を覆い苦しんでいる。大将はそれを見て少し笑った。下から大将を睨み付ける大尉の目には殺気が込められていた。

「大尉！？」

自分はおろした銃を大将に向け、発砲。
しかし、大将の体は硬い鎧で覆われておりこの距離で、この弾では効き目がない。さっき大尉が指される前に撃っておけば、油断なんかしないでさっさと終わらせておけば大尉がこんな事にならなかった……
自分は効かないと分かっていながらも何発も発砲をしていた。大将も自分の方に発砲するがかすろうが、血が出ようが関係ない。今はただ銃弾が無くなるまで自分の怒りをこいつにぶつける。とうとう持っている弾も銃も無くなり、弾の無い銃の引き金を押し続ける音が響く。大将は下品な笑顔を浮かべながらこちらに向かって歩いてきた。

（すみません大尉、自分は何もできませんでした……）

自分にはもう逃げる気力も、戦う気力も残っていなかった。ただただ地面に落ちた薬莢を見て涙を流していた。

「おい、俺をちゃんと倒さずに次のターゲットに移るのは駄目だろ。」

その聞き覚えのある声が耳に入って来た。その声がするを方に顔をあげると、大尉がシグ・サウエルを構えて立っているのが目に入った。

その瞬間シグ・サウエルの銃口から銃弾が発砲されるのが見え、自分はとっさに横に飛びよける。でも、大将の体には硬い鎧が覆われていて撃ってもはじかれるだけだ。一発目は予想通りはじかれ、はじかれた弾がこちらまで飛んできた。

「君も君の部下も頭が悪いな。この鎧は特注品でね、そんな弾では貫通することはおろか、傷をつけることすらできないよ。」

大将は余裕な様子で笑っていた。確かに自分があんなに撃ったのに傷一つついていない。大尉はシグ・サウエルを肩に掛け、少し笑いながら。

「五月蠅いな、黙れよ。もう少しで逝けるからさ。」

大尉はそう言ってまたシグ・サウエルを構える。大尉、血を流しすぎて頭が回らなくなったのか？　鎧に銃弾は効かない、大砲ぐらい巨大なものを持ってこないとあの鎧は破れない。

「ほんとに頭が悪い。何度同じ事をすれば気が済むんだ？」

「別に俺はお前の鎧を破ろうなんて思ってない。撃てる場所は胴体だけじゃないだろ？」

そう言って、大尉は発砲。当たった先は大将の足だった。うわっという声を出して大将はよろめく。そんなことお構いなしに大尉はまたしても発砲。両足と両腕に当てると大将は膝を地面につけてじっとしていた。腕が使えなければ暗器も使えない。大尉はゆっくりと大将の近くまで歩き、大将の髪を掴み銃口をこめかみに当てる。

「やっとひざまずいたか、誰が頭悪いって？　頭悪いのはお前だろ。そんな鎧や部下に頼っているから、いざとなって自分の身一つ守れないんだ。そんな奴に生きている資格はない。さっさと部下の後を追うんだな。」

銃声の音と共に大将は地面にひれ伏した。これで、内戦は終了した。やっとカラーに帰れる。時計を見ると内戦が始まってからまだ3時間しか経っていなかった。しかし、自分にはその三時間がものすごく長く感じた。とても長く……

「大尉、速く手当てをしましょう。報告は自分がしておきますから、速く。」

大尉に近づきそう言うと大尉は無表情のまま“そうだな”と言って膝を折って倒れた。

「大尉！　今、救護班を呼びますから、死んじゃ駄目ですよ！　大尉！」

大尉に必死に呼びかけながら、切っていた無線をつなぐ。ノイズがひどくなかなか音になってくれない。少ししてやっと音になった。

―どうした、そちらの様子は？

「敵軍の大将を討ち取りました。戦いは終了しました。すぐに救護班を呼んでください、大尉が重傷です。」

震える声で無線に叫ぶ。無線は“了解”と告げると切れた。

大尉の手に触れると少しずつ体温が下がっていくのが分かった。このままでは大尉が死んでしまう。そう思うと涙が出てきた。自分のせいで尊敬する人を亡くしたくない、自分がもっとしっかりしていれば……後悔ばかりが頭の中に流れる。どんどん下がっていく体温、流れ出して止まらない血……自分は何をやっているんだ。失いたくないなら自分がしっかりしなければ、泣いている暇なんて無い。1分1秒が大切なのだ。とりあえず大尉を仰向けにした気道確保を行い止血する。軍事学校で習った事を必死に思い出しながら止血を行い、何度も大尉の名前を呼んだり、顔を叩いたりして意識を戻させる。何回かしているとうっすらと瞼が開いた。

「大尉！　しっかりしてください。すぐに救護班来ますから、それまで頑張ってください！」

溢れる涙を必死に堪え、大尉に呼びかける。目に光が入ってないところから、恐らくもう意識はそう長く持たない。

「……ジーニ……と…ブレイン……に…伝言…伝えろよ。……ジーニ、ブレイン。……終わったら……一緒に……飯……行こう……って。ちゃんと……伝えろよ……」

力無い声でそう言う。この伝言から、大尉はまだ死ぬつもりはないらしい……なら自分もがんばらなければ、この人を死なせるわけにはいかない。

「ちゃんと伝えます。だからもうしゃべらないでください。しっかり意識を保ってください。もう少しでいいですから……」

大尉は少し笑うと、薄く開いていた瞼を静かに閉じた。脈を取るとまだかろうじてあるし、呼吸も弱いがしている。しかし、血を流しすぎて体に血液が足りていないのだ。何度も大尉に呼びかける。少しして救護班の声が聞こえた。

「そして、大尉と自分は他の隊員より速くこのカラーに着きました。本当にすみませんでした。自分がもっとしっかりしていれば……こんな事に……」

少尉は頭を深々と下げて謝りながら涙を流していた。少尉の話は恐らく本当だろう。こいつが内戦でこんな大怪我するわけがない。俺は少尉に“お前のせいじゃない”と言って少尉の前に立つ。こんな馬鹿な奴の為に泣いてくれてありがとうの気持ちをこめて少尉の肩に手を置き顔を上げさせる。その時、

「なんて……馬鹿なことしたんだよ！　馬鹿カロン！」

そう叫び、急にブレインが廊下にあった椅子を蹴り上げ半泣きになりながら、早足で廊下を進み。廊下の隅で首からかけていた十字架のネックレスを握りしめながら静かに涙を流していた。俺はガラス越しにカロンをのぞき、静かに息をするカロンを見る。カロンがこんなに弱っているところ、初めて見た。正直ショックを受けている。ブレインは目をこすりながらこちらに戻ってきて壁にもたれかかりながら座る。さすがクールなブレインだ、自分の感情の押さえ込み

方を知っている。

「誰ですか、さっき椅子を蹴ったのは！　ここは病棟ですよ。静かにしなさい！」

婦長がさっきの音を聞きつけてこちらに来たらしい。ブレインは少尉に向かって“こいつです”と指を指す。この様子だと気持ちの整理ができていつものブレインに戻ったらしい。婦長は少尉に注意するとまた戻っていった。ブレインは立ち上がり、静かに息をするカロンを見てすぐに廊下を歩いていった。俺もブレインの後を追って廊下を歩いていく。

2日前カロンは集中治療室から出てきた。集中治療室には3日入っていただけで、自分で息ができるようになった。驚異的な回復力を見せたが、未だカロンは目を覚まさない。軽傷の傷はだいたい治ってきているが、銃弾が貫通したところはまだ治っていない。俺はどうすることもできず、自分の部屋の窓からずっと空を見上げていた。綺麗な秋空だ。

（そろそろ紅茶の時間だな。）

ティーカップを用意し、クッキーを用意したときにいつもブレインはやってくる。ブレインはノック無しに部屋に入ってくる。

「あれ？　今日はいつものクッキーじゃないんだな。俺、あのクッキー好きなんだけどな～」

ブレインはそう言うと俺の向かい側に座りティーポットから自分でカップに紅茶を注ぐと静かに紅茶を飲み始めた。今日の仕事はもう片づけた、と言うより大佐にやらせた。しかし、カロンにやらせる

より遅かった。ブレインの下の奴らに仕事をやさせたらしい。
紅茶もクッキーも食べ終え、そろそろカロンの様子でも見に行くか。立ち上がりハンガーに掛けてある軍服をはおい部屋を出る。めんどくさいが、目を覚ましてもらわないと俺の仕事が進まない・・・病室に入ると昨日までと変わらないカロンがベッドの上で静かに寝息を立てながら寝ていた。ベッドの横の椅子に座り、カロンを見る。なんかこうやってみてたら、目を開きそうな気がするのだ。しかし、この二日見ていたが目は開かなかった。寝ている顔を改めて見ると長いまつげに幼い顔立ちからまだ子供の顔をしている。あきらめて病室においてあるテレビをつけて見る。ここは格好のさぼり場所だ。1時間近く特番を見て、そろそろ帰ろうと思ったとき軍服の裾が掴まれた。

「人の……部屋のテレビ……勝手に見てんじゃねぇ……五月蠅くて寝れない……」

カロンはそう言うと、片目を包帯で包まれ、もう片方の少し充血した目で俺を見てきた。

「カロン！　目覚ましたのか！　よかった……今、医者呼んでやるから待ってろ。」

ブレインはものすごく喜びながら病室を出て行った。“ナースコールを押せばいいのに……”そう思いながらも椅子に座り直しカロンを見る。カロンは手を額に置いて眩しそうに目を細める。腕についているチューブから液体が体へと流れ、体中に巻かれた包帯から見える傷は生々しく体に刻まれていた。

「なぁ……俺何日寝てた？　っていうか腹減った。」

カロンのそんな馬鹿げた質問に答えようとした時、病室のドアが開き婦長さんが飛び出してきた。その後ろには二人の看護婦さんとブレインがついていた。俺は椅子から立ち上がり部屋の隅に行き、カロンの体の具合を確かめる婦長さんを見る。

「怪我も順調に治っています。あとは傷から来る熱さえ引けば退院できるでしょう。」

婦長さんと看護婦さんは一礼して病室から出て行った。俺とブレインはベッドで寝るカロンの横の椅子に座る。カロンは眩しそうに目を細めながら天井を眺めていた。恐らくまだ自分で起き上がることもできないだろう。

「おい、ジーニ。俺の質問に答えてくれる気はある？」

カロンは首だけこちらに向け俺に向かって問う。この5日間栄養剤だけで何も食べていなかったので、少し痩せて頬がこけている。

「あぁ、5日だよ。3日集中治療室に入ってて、2日前にこの病室に入ったわけ。ったくお前寝過ぎなんだよ。そりゃ腹も減るだろ。」

カロンは“ふーん”と呟くと、もう一度目をつぶった。その数秒後にカロンから寝息が聞こえてきた。この技どうやったらできるのだろうか疑問に思う。さて、こいつも寝てしまったし、さっさと退散しよう。俺とブレインはカロンの病室から静かに出て行った。

## 内戦　2―4

涼しい風が髪を揺らしてくすぐったかった。オキシドールと血の臭いが鼻の射して気持ちが悪い。
目を開けるのがしんどくてなかなか開けられない。っていうか開けるのがめんどくさい。なんか音はするけど、何の音かも分からないほど頭が回らない。
やっとの事で静かに目を開けるとぼんやりとした視界が広がった。少し経ってからだいぶ視界がはっきりしてきた。天井から横に視線を移すとさっきからしていた音の正体の心電図が見える。
あれ？　俺ってこんなに心拍数低かったけ？　部屋の扉が大きく開くと、そこから看護婦が入ってきた。

「エファト大尉、お目覚めになりましたか。もうすぐ診察の時間ですから、もう少し待っててください。」

看護婦はそう言い残すとにこっとこちらに笑いかけ、病室から出て行った。
病室の扉が閉まるのを見届け、目線をまた天井に戻す。体を起こしたいが体全体に力が入らない。辛うじて動かせるのは負傷の少なかった右腕だけだが、こちらも感覚が麻痺してなかなか思うように動いてくれない。自分の体なのに自分の意志で動けない自分にいらだちながら上半身を起こすように努力する。病院の寝間着から見えるぐるぐる巻きの包帯が自分で見ていて痛々しい。
数十分たって、やっと上半身を起こすことができた。上半身を起こすだけなのに汗だくだ。上半身を起こしてすぐに腹部と左胸に激痛が走った。膝を抱え、下唇を噛み締めて痛みに耐える。傷は開いてはないようだがとてつもなく痛い。

数分経ってやっと痛みが治まり、力を抜くと体を支えていた力も抜けてベッドに倒れてしまった。何だよこんな怪我でへばりやがって……早く仕事場に行かないと今頃仕事が溜まっているに違いない。そこにあの二人の仕事まで来たら……あぁ、あいつらは俺を殺す気なのだろうか……窓から吹き込む風が涼しく、かいた汗を乾かしてくれる。腹部と左胸の痛みは不規則に脈打つ。もう一度上半身を起こそうとすると今回は一回目より時間はかからなかった、しかしその分その後に来る激痛がひどい。

その時、病室の扉が開いた。病室に入ってきたのは婦長さんと看護婦さんだった。無理矢理体を起こした俺と目が合い、二人とも沈黙。

「エファト大尉、何やってるんですか！　まだ起きれるような体じゃないんですから！　早くベッドに寝てください。」

看護婦は体を起こしている俺を見て、すぐに俺をベッドに寝かせる。せっかく体を起こしたのに、またベッドに逆戻り……悲しいものだ。体を動かす事ができないのでこの病室で診察を受ける。聴診器で心臓の音を聞いたり、点滴を打ったり、内臓がちゃんと機能しているかを調べたり、傷に化膿止めを塗ったり……正直言ってめんどくさい。

こんな傷もう2・3日したらきっと治ってるさ。診察中そんなことばかり考えていた。窓の外の流れる雲をただただ見つめ、くだらない診察が終わるのを待っていた。最後に患者衣を着直して診察終了、看護婦さんは診察結果を記入しながら病室を出て行った。

「化膿してないからいいけど、まだ傷は完全に治ってないし、今は痛み止めで痛みが治まっているけど、痛み止めが切れる夜になると本来の痛みがあるかもしれないから、その時はナースコールで呼んでね。あと、まだ無理に体を動かすと傷口が開くからあまり無闇に体を動かさないように！　分かったわね。」

婦長さんはそう言ってナースコールを俺の真横に移動させた。そんな横に置かなくても、届くよ……俺、そんなに腕短いか？　“いいですか”と婦長さんが聞き直したので、了解の意味をかねて辛うじて無事な右手を挙げてひらひらと振る。婦長さんはため息を一つして、最後にまた“何かあったらナースコールですよ。”と念を押して病室を出る。

動かすなと言われると動かしたくなるのが人間の性質だ、痛み止めが効いている間に体を動かしとかないと体と頭がおかしくなりそうだ。またしても上半身を起こと、点滴を打ったばっかりだったので痛みはそこまで無かったがやはり少しは痛みが走った、何より体全体が重た。下半身はそこまで痛まなく、足をベッドからおろしてちゃんと座る。数秒でできるこの動きをするのにどれだけの時間がかかっただろうか・・・ベッドの下に置いてあるスリッパをふつうの数十倍ゆっくりのスピードで履き、腕に力を体を支え、立ち上がろうとする。立ち上がって足に力を入れ、一歩ずつ確実に病室の扉まで歩み寄る。やっとの事で扉の取っ手に手を掛けるところまで来た……しかし、

ガラッ

扉が開き、取っ手が動いたので体の支えが無くなり床に倒れ込む。顔を上げたときに見えた顔はジーニアスとブレインだった。

「おい、お前なにしてんの？　立てる体じゃないって婦長さんに聞いたんだけど。」

嫌なところで嫌な奴らに会ってしまった……よつんば状態になっている俺を冷たく不審な目で見る。

「いや……仕事場に戻ろうかと思って……」

下を向きながらあいつらと目を合わせないようにそう言い、力と言えないほどの力を腕に入れて、立ち上がり、ベッドへ戻る。ベッドに戻って、二人を見てみると二人は呆れたような目をして俺を見る。

「はぁ？　仕事に復帰するだぁ？　いつも馬鹿な事言ってるけど、現在はさらに馬鹿に拍車がかかったな。きっとボコボコ身体に穴空けたから、どっかの部品が欠落してるんだな、かわいそうに。俺が探してきてやろうか？　きっと一番でかいネジだ。心配しなくてもすぐ見つけてきてやる。」

口は笑っているが、声と目が笑っていない……それどころか怒っているように聞こえる。ジーニアスはベッドの横の椅子に座って窓の外を見ている。もう、怒る気にもなれないらしい。

「な、何が欠落だ！　俺は至って正常だ！　俺はただ病室でじっとしているのが性に合わないだけだ！」

言い返さない方がいいのは分かっているがここで言わなかったら、これから何も言い返せなくなってしまう。言い返すとブレインは笑っていた口が笑わなくなり、無表情に戻る。

「性に合わないねぇ……お前ってなんて言うか、自虐的だよな。人はズバズバ殺してるくせに、なに？　もしかして“本姓はMです。”みないなノリ？」

ブレインはそう言って俺をにらみつける。どうしていいのか分からずにそのままじっとしておく。しかし、さっきまで座っていたジーニアスが急に立ち上がり、俺の前までやってきた。

「ベッドに縛り付けてやろうか？　その方が仕事我慢しなきゃ！みたいなので、快感を覚えるんじゃないの？　俺はそういうのよくわかんねぇけど、お前が悦んでくれるなら、ちょっと嫌だけど協力するよ。任しておいて！」

ジーニアスはにこにこと笑いながらそう言った。なにがわかんねぇだ……お前は完全Ｓだろうが！

「誰が悦ぶか！？　それに俺は自虐的なんかじゃねぇよ。単にこの病室のアルコールと血の臭いが耐えられないだけだ！」

この病室どころか、病院自体の臭いが耐えられない……消毒の臭い、薬の臭い、腐った肉の臭い、血の臭い……それが全部まとまっているのが病院だ。だから病院は嫌なんだ……

「血の臭いが嫌だ、なんて……。もしかしてヴァンパイア？　食欲をそそられて、いつ誘惑に負けるかどうか気が知れないから、とか言う……うん。我ながら、おもしろい説だ、ジーニこの噂流そうか？　カロン・エファト、ヴァンパイア説！」

ブレインとジーニアスは笑っているが、俺はそれどころじゃない……体中は痛いし、座ってるのがやっとなのにこんな冗談言われたら、つっこむのに体力使うじゃねぇか……

「そんなことあるか！　お前らこそ頭のネジ落としたんじゃないのか？　血の臭いが嫌なのは、戦場でかぎすぎたからだよ……何でなんでヴァンパイアになるのか俺には分からん……」

座ってるのがしんどくなり、スリッパを脱ぎベッドに寝ころぶ。や

っぱりこうやってるのが一番楽だ。しかし、こいつらが俺を見下ろしているみたいで、少しむかつく・・・ブレインは俺の話を聞いて“あぁ、なるほどね・・・。”と小さく呟いた。

「っで本題に戻すけど。後はお前の勝手にしろ。俺は誰がどこで死のうが関係ない。自分の体調も管理できないような馬鹿な奴は特に関係ないし、興味もない。ただお前が倒れて、俺にお前の分の仕事が回ってきた時は、この手でお前を殺しに行くからな。そうしたらお、お前はいなくなったことだし、お前の仕事は無くなる。よって俺は仕事をしなくて済む。これで一件落着だ！」

ジーニアスはそう言って少し怖い顔をして俺に向かって言った。俺は言い返しようが無く、黙って考える。確かに自分の体調管理は軍人として基本中の基本。それができないのは軍人として最悪だ。こいつらの言うことは正しい。でも、自分の中の仕事しなければと言う気持ちをどこに持って行けばいいのか分からない。でも、ここでもめたら俺が殺されかねない・・・

「てめぇら普通に残酷な事言うなよ。分かったよ・・・このアルコールと血の臭いが充満した病室でじっと空を見てればいいんだろ。」

気にくわないがそうすることしかできないので、そうすることにした。こんな傷で休んでられないのに、こうすることしかできない自分にむかつきながら病室の窓の外を眺める。

「まぁ空を見る必要性があるのかどうかは疑問だけど、その方がお前自身の為にもなるんじゃない？
よかったよ。お前がそこまで馬鹿じゃなくて。危なく話せなくなるところだったよ。じゃぁまた、見舞いに来てやるから、見舞いにもらったお菓子とかちょうだいな。」

いつもの笑顔に戻ったブレインとジーニアス。ジーニアスは俺の病室の引き出しから紅茶の葉っぱを取り出しポットからお湯を注ぐ。いつの間にこんなもの俺の病室に置いたのだ・・・

「お前らは食べることしか頭にないのか？俺は空が見るのが好きなんだよ。じゃ、菓子以外の目的で見舞いに来てくれや。」

病室の窓から見える空をじっと見てからジーニアス達の方をみる。いつの間にか紅茶の用意ができていた。でも、身体を動かすのがしんどく、痛いので紅茶は飲まないことにした。俺紅茶派よりコーヒー派ですし・・・

その時、体中に激痛が走った。まだ痛み止めが切れる時間じゃないのに・・・腹部と左胸に肉がえぐられたみたいな激痛が走り、額に脂汗はにじみ出る。自分自身に何が起こったか分からず、痛みに耐える事もできなかった。声にならない叫び声を出している俺に何が起きているのか分からないが、二人は俺が苦しんでいることは分かったようだ。とりあえずナースコールに手を伸ばすが身体全体に力が入らずボタンが押せない。ボタンに指をかけた時、ブレインの指が俺の指を押してくれた。機械音が小さく鳴り響く中えぐられたような痛みが脈打ち、大きく呼吸をして必死に痛みに耐える。数分して看護婦が病室に入ってきて、心電図や点滴を確認しながら意識が薄れる俺に声を掛けている。そうもしているうちに婦長さんが病室に入ってきてた。入ってきた婦長さんはどうやらもう状況が分かっているようだ。婦さんは病室に入ってきてすぐに俺の腕に注射を打った。どうやら痛み止めらしい、痛み止めを打った後数分してだんだん痛みが和らいでいく。痛みの後にどっと疲れが来た。体を横にしたまま戻すことができずに固まる。動けない・・・

「もう、無理に体を動かしたりするからこんなことになるんですよ。

薬も万能じゃないんですから。」

婦長さんはそう言って、棚の上に痛み止めの薬と化膿止めの薬を置いて病室を出て行った。看護婦は動けないでいる俺を仰向けにしてから病室を出て行った。なんかとても惨めな気分だ。

「ほら、怒られた～もうこんな無茶すんなよ。じゃ俺たちは仕事に戻らなきゃな。」

ジーニアスはそう言って椅子から立ち上がり大きな伸びをした。こいつ、俺が苦しんでいるときにのんきに座ってお茶飲んでやがった・・・まぁこいつはこんな奴だと思っていたが、ここまでひどい奴だとは思わなかった。でも・・・俺もこいつらに心配させたんだよな・・・怒るに怒れない・・・

「おう、仕事がんばれよ。俺もすぐ退院して戻るからよ。それまで俺の仕事増やすんじゃねぇぞ。」

俺がそう言うと、二人は笑顔で“いや”と言って笑いながら病室を出て行った。

急に静かになった病室には部屋に鳴り響く無機質な音が規則正しく永遠に響いていた。窓の外に目をやると、綺麗な秋空だった。

## 内戦　２－４（後書き）

次はなかなか長くなりそうです……
ってか、カロンが可哀想……

## カロン・エファト　3―1

――「やーい、変な目！　お前鬼の子だな！」

――「鬼の子！　鬼の子！　お前、山で動物喰ってるんだろ！」

うなされながらゆっくり目を開くと目覚まし時計の文字盤が目に入った。
まだ夜中の3時だ。
重たい体を起こし、下を向くと目から少しの涙が流れ、布団に落ちる。

（我ながら女々しいな……）

懐かしい夢を見た。
よくこうやっていじめられ、喧嘩して、その親が出てきて叱られて、また笑われる。それの繰り返しだった。
こんな生活は嫌だったが、母さんが必死に働いて行かせてくれてるんだ、卒業して軍隊にはいるまであきらめるわけにはいけない。だからいじめにも耐えて学校に通った。
ベットに体を寝かせ、横を向いていた体を上に向け、天井を見上げる。久しぶりの自分のベッド、自分の部屋・・・
昨日まで病院の病室で生活をしていて、一週間経った昨日やっと退院することができた。
傷が急に痛み出すことも少なくなり、リハビリも終わった。明日、と言うより今日から仕事復帰することを大元帥から許された。
やっと仕事ができると思うとうれしいし、ギリギリ軍事会議にも出

席できそうだ。まだ、少しだが寝れそうだ……もう一度目を閉じ眠りにつく。

＊＊＊＊

五月蝿い目覚まし時計が鳴り響き、忌々しい太陽の光のせいで目を薄く開く。
万華鏡のような視界で時計を見ると時計の針は7時を刺していた。
本来6時30分には職場に入っていなければならないのだが……

（目覚まし、かけ間違えた……まぁいいか、いつもはもっと遅い時もあるし。）

目覚まし時計を止めてゆっくりと体を起こし、またしてもゆっくりとした動きで壁に掛けられてる服に手を掛ける。
忌々しい太陽め、なんで出てくるかな……ずっと夜だったらいいのに……
朝は頭に痛い。低血圧はしんどいし、寝起きが一番機嫌が悪い。
ワイシャツに袖を通し、今日はちゃんとした制服を身につける。
今日は軍事会議だから、いつもみたいなルーズな格好はできない。
だからちゃんとした格好をしなきゃいけない軍事会議は嫌なんだ。
ネクタイをして、第一ボタンまでボタンを止め、ベルトも普通のをする……
カロンはよくこんなかたっ苦しい格好をしていられるな……軍服をきちんと着るのなんかこういう軍事会議か、戦場に出るとき以外はしたくないものだが、あいつは毎日こんな格好だ……正直、見てて苦しくなってくる。
ベルトにホルスターを取り付け、ブーツを履いて大きく伸びをする。

そして、少しだけネクタイをゆるめる。まだ軍事会議は始まらないし、始まる直前になったらきちんとした格好をすればいい。っと言うより会議前になったら嫌でもカロンが服装を直してくれるからいいか。
まだ頭が痛いし眠たいが部屋に鍵を掛けて大きなあくびをしながらゆっくりと廊下を歩く。

この時間だ、廊下には俺以外の人は誰も歩いていない。静まりかえった廊下に俺の足音だけが響き、不気味だ。
寮棟を出て仕事場に向かう途中に渡る廊下から見える町の様子を見て、足を止める。
廊下の窓の前に見覚えのある誰かが立っている。こんな所にいるとは思いもしなかった男が立っていた。

「カロン、どうしたんだ、こんな時間に、こんなところで……お前らしくないな。」

カロンの数歩後ろからカロンに話しかけると、カロンは少しこっちを見てまた窓にむき直した。
この前みたいに、こいつに不意討ちで話しかけると殺されかねないから数歩後ろから話しかけるという技を覚えた。しかし、病院にいた昨日までのカロンとはちょっと感じが違った……

「あぁ、お前か。いや、久しぶりに仕事場に行って仕事してたらどうも気が乗らなくて……少し休憩もらって今休んでる。」

意外な答えが返ってきたびっくりした……
入院しているときはあんなに仕事、仕事って言ってたこいつが仕事に気が乗らない？　やっぱりこいつ銃弾ボコボコ打ち込まれたから頭おかしくなったんじゃねぇのか？　暇なときに空を見上げている

ときはよくあるけど、こいつがこんな黄昏れるところ久しぶりに見た。しかし、こいつが落ち込むと調子が狂うし、なんか……キャラじゃないよな……仕事場で何かあったってわけじゃなさそうだし、どうしたんだ？

「久しぶりに、昔の夢を見たんだ……」

一瞬、心を読まれたかと思ったが、違うようだ。こちらを見ずにカロンは小さな声でそう呟いた。

昔の夢？　昔っていつのことだ、こいつとは小等部の頃に会ったけど夢になるようなことなんて星の数ほどあるがな……どの星の事だろうか……

「昔って何だよ？　お前が昔話か？　“過去を振り返らない！”とかよく言ってるようなお前が似合わねぇ～っていうかお前記憶力あんの？」

「ひどっ！　あのな～俺だって過去を振り返ることぐらいあるよ。ほら、お前らと初めて会った時の夢だよ。」

こいつと会った時、それはよく覚えてる。こいつは小さい頃から目立っていたし、俺が気を許した数少ない友人だったから……

＊＊＊＊

カロンと始めは学年もクラスも同じなのに、あまり話さなかった。何しろ俺は人見知りキングだったし、カロンはあまり人を引きつかせなかったからな。

カロンは途中から入ってきて成績は上の下ぐらい、休み時間も一人で本を読むか、勉強をするか、寝てるかのどれかだった。カロンが誰かと仲良く話す所はあまり見かけなかったし、正直俺もカロンの事はあまり知らなかった。
カロンは小等部三年生にしては幼い顔立ちに小さい身長だったが、一部の女子にはモテていた。しかし、カロンは寄ってくる女子をことごとく避けていた。
その態度や、カロンの容姿や性格からか、よく喧嘩や苛めのターゲットにされていたことだけはさすがの俺も、嫌でも噂が入ってきて知っていた。
俺もだいたいは一人でふわふわしてたし、いつも誰かと一緒にいるなんてことはあまりしなかったし、したくなかった。

そんなある日の昼休み、昨日裏庭にある木の影が思いの外、居心地が良いことに気がつき今日もそこで昼寝をしようと、その木へ向かった。今日は日が照ってるが、ぽかぽか陽気で絶好の昼寝日和だ。木にもたれ掛かって昼休みの騒がしい校舎を眺めてながらぼーとしていた。

「ねぇ、そこ俺の特等席なんだけど。」

ぼーとした頭にいきなり話しかけられてびっくりした。
横を見ると、光の入ってないやる気のない目をした少年が無表情のまま本を持って立っていた。
確かこいつは、学年トップの天才、ジーニアス・ワイズ。
こいつもクラスではぼーとしていることが多く、訓練でも勉強でもなんなくこなしてしまうような奴だ。俺は小さく“あぁ、ごめんね”と言って少し位置をずらす。
ジーニアスは無言のまま俺の横に座って本を開き、本を読み進める。

それから少しの間ジーニアスは本を読み、俺は日向の暑苦しさと日陰の涼しさを比べるように涼んでいた。そんな時、突然ジーニアスが口を開いた。

「この特等席を見つけるとはお前、なかなかの奴だな。ここ、日向ぼっこには最適なんだよ。」

本から目を離さすことなく、俺に話しかけるが、人見知りキングの俺はどう話していいかわからない。

とりあえず“うん、そうだね。”と感情のこもってない生返事をしておくことにして、先程より少し静かになった校舎を見上げる。

それから数分沈黙が走ったが、その沈黙を破るには不十分なぐらいの声が横から聞こえた。

「お前、めんどくさがり屋だろ。」

ジーニアスは突然、本から目を離さずに呟いた。俺はその言葉に少し驚きながらジーニアスの方を見る。ジーニアスは一瞬目だけこちらに向けて、また本へと視線を移した。

「……よくわかったね。さすが、俺が耳にするだけあるよ、君は。」

先程より少し明るめのトーンで答えると、ジーニアスは少し、いや露骨に嫌そうな顔をして俺の方を見てから、明らか作り笑顔をして笑った。

「俺と同じ臭いがする。」

そう言って満足したのか、またしても本に視線を戻してしまった。

「奇遇だな、俺も今そう思ったところだったんだ。纏う空気は全くの逆なのにな。」

俺はクラスでもふわふわしていてあまり足が着いていないが、こいつは足がちゃんと地面についている。それなのに、他の奴等とは違って鬱陶しくない。

そのまま、短い沈黙を挟みながらも俺達は少し距離を縮める事ができた。ジーニアスは噂からかか、冷淡で高飛車なイメージがあったが、全然違った。ほんわかしていて、おもしろい。性格に共通点が多かったからか、人見知りの症状は出なかった。

昼休みも半分が終わり、大分会話も弾んできた時、俺達の目の前に何かか落ちてきた。

黒く短い髪に緑かかった瞳をした、平均より遥かに小柄で童顔な少年が、身体中に傷や草を着けて壁から鈍い音をさせながら落ちてきたのだ。

「って……思いっきり腰打った……ん？」

尻餅をついて汚れたボロボロになった制服のズボンの砂をはらい、よろめきながら立ち上がる。

少年は俺達の存在に気が付きこちらを緑がかった瞳を薄く開いて見る。

少年の頬には誰かに殴られた様な痣がくっきりと残っていて、口からは少量の血がついていた。頬だけではない、露出している肌という肌に痣が見えるが、明らかに軍事訓練でできた怪我ではなかった。

こいつがあの噂の苛められっ子カロン・エファト。

その傷ついた姿を俺達は驚きと哀れみの目で見ていたら、校舎の裏からいくつか人の声がした。その声に反応して声のした方を見てか

ら、カロンは小さく舌打ちをして、

「くそっ、あいつらしつこいな。なぁ、あんたらここ危ないよ。速く逃げた方が利口だと思う。」

カロンはそう言うと俺達がもたれ掛かってる木に飛び付き、まるで猿のように軽々と登っていく。こいつものすごい身軽だな……

カロンが木の上に身を潜めてから少しして向こうから※ソアラーの男子5人が所々怪我をした足を引きずりながら歩いてきた。※（高校生）

「おい、お前達あのチビ餓鬼どこいったか知ってるか？」

俺達は顔を見合わせて、首を横に振った。そうすると高等部の男子達は校舎の向こう側に消えていった。

消えてから少ししたら木の上からカロンが逆さまでぶら下がったまま俺達を見て少し微笑んだ。

「ありがとな。御陰でうまく撒けた。」

いつも教室の机で勉強しているか、本を読んでいるか、寝ているかのカロンとは思えないほどにこやかに笑った。

こいつは、人が嫌いなのだと思ってたが、以外にフレンドリーだ。っというより、こいつは仲良くしたいのに周りがそうさせてくれないのかもしれない……

「なんでそんなにボロボロなんだ？　それにさっきのソアラーなんだよ。」

俺が聞きたい事をジーニアスが代わりに聞いてくれた。カロンは綺

麗な弧を描きながら木から下りて着地をし、服に着いた葉っぱを叩きながら俺達に話した。

「いや、昼休みに裏に呼び出されてさ～そのままボコボコにされた。でも、そのまま殴られただけなのは俺の性に合わないし、ムカついたから全員返り討ちにしてやったら、なんか怒ったから逃げてきたわけ。痛っ……」

カロンはぱんぱんに腫れた頬に手をおいて顔をしかめた。ソアラーの奴にリンチにあったんだ、それは相当痛いだろう。頬だけではない、体中という体に怪我がある。こいつ一体どんな生活してるんだ？

「こっちに座って、傷見せろよ。」

ジーニアスはこいつにそう話しかけた。ジーニアスはそう言ってカロンの腕を引っ張った。カロンは少しびっくりして、微笑み首を横に振った。

「いいよ、勝手に治るから。それに、俺に関わったらお前達もターゲットにされるし、こんくらいの怪我なんか日常茶飯事だし。じゃぁな。」

指をポキポキ鳴らしながらそう言うと、カロンはまた小走りで駆けて行った。カロンが走り去ってから少しして、さっきのソアラーの声が遠くに聞こえた……

## カロン・エファト　3―2

重たい瞼を必死に開けながら、つまらない授業を耳に入れて反対側の耳から出ていく。
算数なんてめんどくさいし、このジジィ、モゴモゴしててなに言ってるか分からない。
しかもこのジジィ寝るなとか言い出しやがった。ふと、後ろを見るとジーニアスは静かに寝息をたてて寝ていた。何であいつは良いんだよ……
あまり気にしたことがなかったけど、授業中にあいつが起きてることは数少ない。それでも、いつも学年トップを取っているこいつが“化け物”扱いされるのもわかったような気がする……寝ていて、急に問題を当てられてもすぐに答えることができるんだ、こいつ本当に天才かもしれない……
今度は窓際を見て見るとカロンが真面目にノートを取りながら授業を受けている。顔には先ほどできた大きな痣を覆うようにガーゼが貼られていた。
あの後も、あの高校生に捕まって攻撃を受けたのだと思われた。授業に遅れてくるし、さっきより顔にできた痣が大きくなっている。こいつこんな怪我をしながら授業を受けるなんて、こいつ本当に真面目だな。俺だったら絶対保健室でサボってる。

「じゃぁ次の問題を解いてもらおうかな、え～とじゃぁカロン君解いてみて。」

先生に当てられ、すっと立ち上がりすらすらと数式を言う。しかもその答えは正解、でもこいつはジーニアスと違って努力の結果か、真面目からだろう。静かに席に座り机に頬杖を着いて黒板の文字を写し始めた。それを見て、よく思わない男子が授業中にこそこそと

何かを話しにこっと笑うのが俺ははっきりと見た。
それから少ししたら5限目終了のチャイムが学校に鳴り響いた。先生は黒板に大きく明日の宿題のページ数を書いて教室から出て行った。
先生が出て行った瞬間、教室がざわめきだした。皆友達と話したり、遊んだり好きなことをやっている。
俺も大きく伸びをして椅子にもたれかかる。
カロンは窓際の席でいつもの通り机に顔を伏せて寝ている。
しかし、今日はいつもの通りにはいかなかった。

「おい、カロン。お前生意気なんだよ。すかした顔しやがって。」

クラスの男子が3人、カロンの机の周りを囲み、カロンを見下ろし、餓鬼みたいな理由でカロンに突っかかる。
カロンもそれに気がついたのか体を起こし薄く開いた目で3人を見る。
そして、めんどくさそうにため息をついて短く切られた髪をガリガリと掻く。

「別にすかした顔なんかしてないよ。そう見えたなら謝るけど、謝った方がいい？」

カロンはそう言って薄く開いた目で3人を見て首をかしげる。さっき会ったときのにこやかな笑顔の影はどこにもなかった。その目は怖くも感じるほどの殺気を出していた。

「てめぇふざけんな！　俺らのこと見下しやかって！」

3人の中のボス的存在の男子、グリードはカロンの胸ぐらを掴みカロンの体を持ち上げる。

カロンは平均身長より小さいから、ごつい体のグリードなんかには簡単に持ち上げられてしまう。
持ち上げられた時に上がった服から見えた腹には目を背けたくなるほどの、ひどい痣や切り傷、火傷がはっきりと残っていた。こいつ、こんな傷を受けてながらも毎日学校に来てるのか……

「別に……見下してなんか……ない……」

カロンは襟で首を絞められて息苦しそうだが、薄く開かれた目はさっきと変わらなかった。
カロンは首を絞めているグリードの手を掴み力を入れる。
それを反抗とみなしたのか、グリードはもう片方の手でガーゼで覆われた頬を思いっきり殴った。
カロンは窓に背中と後頭部をぶつけ崩れた。その瞬間教室にいた生徒は口を押さえて驚きながら一瞬静かになった。
カロンは咳き込みながら、小さく声を漏らし下唇を噛み締めて痛みに耐える。元々大きな痣があるところを思いっきり殴られたのだ、相当痛いだろう。

「知ってるぜ、お前の父親、山の動物殺しの為に軍隊やめたんだろ。元軍人が情けねぇよな。軍人辞めて、山の主になるなんてばかばかしいんじゃねぇか！」

その噂なら知ってる。カロンの父親はミドルにある軍隊本部カラーに所属し、大佐になるほどの人だったらしい。しかし、４年前に急に軍隊を辞めてこの町の自分の山で仕事をするようになったらしい。だが、それから一年もしないうちにに流行病にやられて死んでしまったっと……カロンはグリードの言葉を聞いた瞬間、今まで薄く開いていた緑がかった瞳を大きく開いた。

「俺の父さんはそんなんじゃねぇ！　父さんは俺や母さんの為に軍隊を抜けて、この山を大切にしながらこの仕事に誇りを持って働いてた！　お前みたいなお金と親のすねをかじってるような奴に父さんを馬鹿にする価値なんか無い！」

クラスが一緒になって3年になるがこいつがここまで怒ったのは始めてみた。

自分をバカにされたことより、父親をバカにされたことの方が奴にとっての地雷らしい。

カロンはそう言った後、グリードを思いっきり殴った。男子がカロンを殴った力よりカロンが殴った方が威力は高いようだ。

グリードは後ろに飛び机に体を強く打ち付けた。今までこんなに怒ったカロンを見たこと無かった俺達はさっきよりも、もっと驚いて声も出なかった……カロンは息を荒げながら尻餅をついているグリードを見下ろしていた。

「痛っ……先生！　こいつが俺を殴ったよ！」

グリードは頬を押さえながら教室に入ってきたばかりの先生に叫ぶ。こういう奴が一番ムカつくんだよな、自分は被害者に成り下がる奴。先生も現在どういう状況なのかが分からず、とりあえず二人の間に入り事情を聞こうとする。その時―

「先生、グリード達が最初に手を出しました。カロンは正当防衛ですよ～」

教室の後ろから聞こえた声はやる気がない声だった。

後ろを見ると眠たそうな目をしながら手を上げるジーニアスだった。

こいつがこんな発言するのにびっくりしてみんな動きを止めた。ジーニアスはひとつ欠伸をして続ける。

「そいつら、自分より勝ってる奴が嫌いみたいで、単なる腹いせですよ。」

ジーニアスはそう言ってカロンに近づき“お前はやり過ぎ”とデコピンをして髪をくしゃくしゃにした。

「そんなん知らない！　こいつがいきなり俺を殴ったんだ！」

グリードはジーニアスの発言など無視してしらを切る。
グリードのその言葉を聞いた瞬間俺の中の制御装置がショートした。
怒りで冷静な判断が出来ず、今の自分の感情に身を任す。
普段なら冷静な判断で無視、または公にならないぐらいに後で締めるのだが、今被害にあってる奴は短いが俺と交流があった奴、そして少なからずの好意を持った奴だ。だから―
俺は怒りの感情に身を任せ隣の奴の机を思いっきり蹴り倒す。机は隣の机にぶつかり凄まじい音と共に転がる。
その音に驚きジーニアス以外の教室にいた人が全員俺に視線を向けた。ジーニアスは俺がそうすると分かってたかのように俺を見てニコッと笑った。それも無視してポケットに手を突っ込みづかづかとグリードの前まで歩いていき、グリードの胸ぐらを掴み自分の方に引き寄せる。

「てめぇ、それでも男か！？　自分から理不尽な喧嘩吹っ掛けといて、立場が悪くなりゃあ我が身可愛さに、身の保身か！！　どこまで甘ったれた根性してんだよ！？　その根性叩き直してやる！？」

そう叫びグリードの額に思いっきり頭突きを食らわす。グリードは後ろに倒れ目に大粒の涙を溜めながら、何度も“ごめんなさい”と呟いていた。ジーニアスはひゅーと口笛を鳴らし、カロンは目を飛

び出すほど開いてその様子を見て驚いていた。
しかし、一番驚いていたのは自分だ。なんで俺はこんな事をしたんだ？そして、ふと我に返って最高に後悔した。

「４人共、放課後生徒指導室に来なさい！」

先生はそう叫ぶと怒って教室から出ていった。周りも少し重たい雰囲気に包まれた。最悪だ……

「４人って俺も入ってんの？　やだな～あっ、それよりブレイン。額から血が出てるよ。」

ジーニアスはそう言ってカロンの頭に顎を乗せてぐりぐりしていた。しかし、そういうジーニアスの顔は嫌そうな顔はしてなかった。むしろなんか楽しそう。グリードの取り巻きがグリードを保健室まで連れていってしまった。
俺はジーニアスにそう言われて額に触れてみるとヌルッとした液体が流れていた。おっと、さっきグリードを頭突きしたときに切ったのかな……？

「ごめんな、俺のせいで二人共巻き込んで。でも、助かったよ。」

カロンはそう言ってさっき中庭で見た時より輝いた笑顔をした。その笑顔を見た時、クラスの女子が少しざわめいた。こいつ天然っていうか素でこれなのか？
カロンは俺の額をハンカチで拭いてくれた。小さい身長と俺の長身で背伸びをしながらも必死に何度も拭いてくれた。

「いいよ、俺達は好きでやったんだから。そんなことより、昼休みといい今といい、なんでお前そんなにやられるんだよ。」

ジーニアスはハンカチで額を拭き終わったカロンの頭から顎を離しカロンの前に立ち、カロンの頬をゴムのように伸ばしながら“おぉ、よく伸びる、プニプニだな”と言いながら言った。ジーニアスはこんな真面目な時にもふざけている……

「そんなの、俺が貧乏で目の色が人とは違うからに決まってるじゃん。」

カロンは殴られたばっかりで腫れた頬を摘まれ少し痛そうにしてるが答えた。

瞳の色だの金だのそんなことでこいつは虐められてるのか。そんなことをやってる奴の頭はどうなってるんだ？　あっそういえば……

「お前、腹も怪我してただろ。見せてみろよ、手当てぐらいなら出来るし。」

さっき胸ぐら掴まれた時に見えたあの傷、頬の痣なんかよりもっとひどかった。

速く手当てしないと化膿してしまう。これでも医学の本は読んだし、手当ての仕方ぐらいは保健の時間に習ったからできるはず。カロンは頬を伸ばしているジーニアスの手をどけながら、こっちを見て少しびっくりし、そして少し怯え顔を青くした。

「いいよ、手当てぐらい自分で出来るし……それより、なんでこんな俺に構うんだ？」

カロンは不思議そうに俺達に問う。

そう言えばこいつが喧嘩以外で誰かと話すところなんて見たこと無かったな……

こいつ今まで一人でいたから誰かに構ってもらうという事が無かったんだ……

「そりゃ友達だから心配するのは当たり前だろ？　それにお前面白いし、なんか気が合いそうだからな。」

そう言ってやると、カロンは“友達？”と首を傾げ、俺とジーニアスの顔を見る。少しして耳の端まで顔を真っ赤にして俯いた。こいつ単純だな……

俺とジーニアスはそんなカロンを見て少し笑って机に戻るために歩き出す。その時、

「……ありがとう。」

小さいがちゃんと耳に届くような声が後ろからした。

後ろを振り向いて見ると少し頬を染めて満面の笑みを浮かべたカロンが立っていた。それを見てつい俺とジーニアスも笑ってしまった。

こいつもこんな笑顔ができるんだ……その笑顔を見て、またクラスの女子が騒ぎ始めた……

## カロン・エファト　3―3

「ブレインちょっと明日の朝のパン買ってきて！」

妹と弟が五月蝿いリビングのソファーに寝転びながら本を見ている時、喧しい母親の声が家中に響いた。

チビ二人はテレビゲームに燃えていて全く話を聞いていない。今日は先生にこっぴどく怒られて気分がブルーなのに…カロンはそのあとすぐに走って帰っちゃうし、ジーニアスは車でお迎えと来たもんだ……

「チビ二人に行かせれば、初めてのおつかい的な感じで。」

チビ二人は“え～”と声を漏らしているが無視。何でそう言う自分にとって悪いところだけちゃんと聞こえてるんだよこのチビ共……

「もう、夜遅いんだから二人に行かせれるわけないでしょ！　さっさと行ってきてちょうだい！」

そう言って、買い物籠とお金だけ持たせて玄関から放り出された。くそっあのババァ俺は夜遅くに買い物行かせていいのかよ。俺とあいつら3歳と5歳しか変わらないんだぜ、なのに俺はいいのかよ……ブツブツ言いながら町を歩く。町は店の明かりで明るかったが、人はあまりいなかった。町外れのパン屋に入ると夜遅いのにまだパンが結構残っていた。

（こんな夜遅くにパン買いに行かせてるんだ、俺の好みのパン買っていこ～それに帰りに一個食べて帰ろ！）

るんるん気分でパンを選び、お会計を済ます。パン屋の時計を見ると１０時を回っていた。パン屋から出て家に帰るまでパンをむさぼり食いながら帰る。やっぱりここのパン屋さんはおいしいや。そんなことを思いながら帰っていると、本屋から見覚えのあるシルエットが出てきた。

「あっ、ブレイン。どうしたのそんなに大量のパンを持って。もしかしてそれ一人で食べるとか言わないよね？」

このやる気のないしゃべり方、ジーニアスだ。“親に頼まれたの”と言いながらパンにかぶりつく。ジーニアス両手に大量のものを持って本を読んでいた、こいつの腕ってどうなってるんだ？

「もほうか？　（持とうか）」

見るからに重そうな荷物を両手で持つのはさすがにしんどそうなので親切心から持ってやることにした。ジーニアスはありがとうと言って、小さい方の袋を渡した。小さいから軽いのかと思ったら意外に重たかった……左腕にずっしりとした重みがくる。パンを飲み込み、ジーニアスに訪ねてみる。

「何入ってるの？」

「ん？　そっちはコロッケに、コーヒー牛乳、お菓子に、ゼリーそれに１リットルペットボトルのジュースかな？」

こんなにどうするんだ……こいつ一人で喰うのか？　いや、この細身でそれはないだろう。実際こいつが昼飯を馬鹿食いしてるところは見たことがないし、そういうタイプではないだろう。俺は“これ、

どうするの？”と小さい声で聞いてみると、

「コロッケは今食べて、他は明日の朝御飯と明日のおやつにする。暇だったから家を出てきたら、なんか良いものがたくさんあったから買っちゃった。」

俺が言うのもなんだが、なんて自由人なんだ……

二人で話しながら帰っていると、ジーニアスが一つ路地を入ったところの本屋に行きたいと言い出し“まぁ暇だしいいか”と着いていくことになった。

路地は暗く、鼠や虫などがたくさんおり、汚く臭かった。

一つの路地を入っただけでこんなにも違うものだろうか……そんな路地の向こうに一つ光を出している店があった。どうやらレストランらしいがどうも怪しい……

そういえば、このレストラン……店長が暴力的とかいう噂を聞いたことがある。

なんかバイトの人を殴ったりするらしい。中からはガラスの割れる音や何かがぶつかる音が響いていた。やはり噂は本当だったらしい。

二人でそのレストランを見ていると、レストランの横に残飯を捨てるゴミ箱が無造作に倒れていた。

その残飯を漁る鼠を少し哀れな目で見ていたが、よく目を凝らしてみるとそれは残飯だけではないことがわかった。

人の足？　二人で顔を合わせ頷き、一歩ずつゆっくりそのゴミ箱に近づく。鼠が走って逃げゴミ箱を避けると……

「カロン！？」

ゴミに紛れていたのは、夕方まで一緒にいたあのカロンが無惨な姿

で倒れていた。
頭からは血を出し、身体中が痣や切り傷、タバコを押し付けた跡の火傷が生々しく刻まれていた。あの傷はこれだったのか……
息も脈はしているが、だいぶ衰弱しているようで、カロンはぐったりして動かなかった。どうしてカロンがこんなことに……少し体を持ち上げるとカロンの体は思った以上に軽かった。

「とりあえず、この近くに俺の家があるから連れていこう！」

ジーニアスはそう言ってカロンを軽々と担ぎ、俺はパンとジーニアスの荷物を持って走る。こいつこんな重いの片手で持ってたのか！？

走って、着いたジーニアスの家は豪邸だった。
たしか、ジーニアスは財閥のワイズコンツェルンの次男坊だ。
株や石油からいろいろやってるから大金持ちの中の大金持ちだ。世界で『ワイズ』の名前を知らない奴がいないくらい世界規模の財閥なのだ。
こいつの家は使用人が１０００人以上、部屋は５０００部屋を越える屋敷に住んでる。敷地の大きさはバチカン市国の三倍の大きさで、この町の横にその敷地が広がっている。門の前までは来たことがあるが、中に入るのは初めてだ。
ジーニアスはカロンを担ぎながら門を開けるパネルに何やら番号を打ち込むと門が自動的に開いた。ジーニアスの後について屋敷の敷地に入るが、この中は世界が違うように思えた。屋敷の扉が自動的に開くとズラッと使用人が5人並んだ。

「お帰りなさいませ、ジーニアス様。とそのお友達様、いらっしゃいませ。」

使用人はにこやかな笑顔で俺達を迎えた。ジーニアスは平然としているが、庶民の俺は心の底から驚いている。驚きすぎて手に持っていた荷物を床に落としてしまった。落とした音で我に返り、荷物を拾い使用人達に頭を下げる。こいつ、毎日こんなところで生活しているのか……

「至急、こいつを医務室？２４に入れてくれ。」

ジーニアスはそう言ってカロンを使用人に渡す。使用人はすぐさまカロンを抱きかかえ、早足で廊下を進み、どこかへ連れて行ってしまった。

ん？　待てよ、？２４って……

「医務室って何部屋あるんだよ！？　ってか家広すぎ！」

俺が庶民の思っていること、疑問に思っている事を代表して言ってジーニアスに問いかける。ジーニアスはカロンの血やゴミがついたＹシャツを脱ぎ捨て、走った際にかいた汗を拭ってからゆっくりとした口調で俺に説明する。

「５０部屋はあるかな。使用人がたくさんいると、大変なんだ。そんなことより、ブレインはカロンと一緒にいてやってくれ、俺はちょっと用事を済ましてくるよ。」

そう言ってジーニアスは使用人を１人呼び出し、医務室？２４へ案内するように命令して何処かへ行ってしまった。

無駄に幅の広い廊下を汚れたＹシャツを片手にゆっくりと歩いていってしまった。

俺はこの広い屋敷の中で、少し疎外感を感じながら使用人の後をつ

いて行く。手に持った荷物がさっきより少し重たく感じた。少し歩いて医務室？２４の前に着くと、使用人は一礼して何処かへ行ってしまった。一人残されて心細く感じた。ただの医務室なのに入るのにだいぶ勇気がいる……

しかし、ここで立ち往生していると単に変な奴だ。勇気を出して医務室に入ると、傷だらけのカロンがベットに横たわって治療を受けている所だった。

頭には包帯が巻かれ、体中にガーゼが貼られている。打撲、切り傷、擦り傷、捻挫、そして肋骨が二本と鎖骨、右足が折れているそうだ。ちゃんとした肌が見えているところの方が少ない気がする。ベッドの横には血のついた布やガーゼが大量に置いてあり、荒い息をしながら寝ているカロンを医者が治療している。

しかし、カロンの場合、傷だけでなく衰弱した状態で栄養失調もあるため、回復が遅いらしい……

俺はどうしたらいいか分からなかったので、とりあえず部屋の壁にもたれ掛かり、さっき買ったパンをゆっくりと食べ進める。治療が終わったのか医者が俺に一礼して医務室を出て行った。

医者が出て行ったのとほぼ同時にジーニアスが医務室に入ってきた。用事というのは服を着替えに行くことだったらしく、綺麗でピシッとしたＹシャツに着替えられていた。

「とりあえず大丈夫みたいだな。今、コックに何か作らせてるから、ブレインも食べる？」

俺はパンを呑み込み頷く。っていうかお抱えコックかよ……

ジーニアスはカロンの横に椅子を置いて、座った。よく考えたら、こいつと話したの今日が初めてだったのに、なんかうち解けてる……

ジーニアスはいつも無口で、何を考えてるのか分からないような奴だったが、結構ユニークでおもしろい奴だ。

それに、男の俺から見てもこいつは美形だと思う。クラスの女子が騒いでるのが分かったような気がした。黒髪を肩の高さぐらいまで伸ばしており、何で切らないのかっとクラスの女子の質問に対しては“だって切るのめんどくさいんだもん”っという何とも貴族の息子とは思えないほど適当な答えだった。
黒い瞳がカロンを映す中、俺の栗色の瞳はジーニアスを映している。ジーニアスは目をカロンから目をそらさないまま俺に聞いてきた。

「なぁ、カロンは何であんなところで倒れてたと思う？　まだ※プライマリーなのに、何であんな路地裏の店にいるんだとおもう？」
※（小学生）

確かに、あんな薄暗い路地裏の店にプライマリーがいたら危ない。だから学校では“夜に暗い路地裏に行ってはいけません”ってしつこく言われてる。
まぁ俺はそんなルール守らない、っていうか守ろうとも思わない。
まぁ俺とジーニアスは路地裏に行ったからカロンを発見することが出来たっと言ったらそうかもしれない。
しかし、カロンはルールや規則は守る奴なのに、なんでこんな所にいるんだ？

「なんか理由があるんじゃない、目を覚ましたら聞いてみようよ。」

ルールや規則をきっちり守るカロンが路地裏で、しかもこんなボロボロになって倒れているなんて、何か理由があるに決まってる。だから、カロンが目を覚ましたら、聞いて見ようと思った。
しかし、心のどこかでは聞きたくないっという気持ちも少しあった。聞いたら駄目なんじゃないのか？聞いたら、カロンはすんなり言ってくれるだろうか……聞いてしまったら駄目なような気がした……

## カロン・エファト　３―４

正直言ってカロンと話したのはカロンが遅れて入学してきた時の自己紹介のだけだった。
初めて見たときからその容姿や性格に少し興味はあったので、野次馬に紛れて話しかけてみたが、ちゃんと話したのは今日が初めてだ。カロンはいつも無口で、笑顔なんて今まで見たこと無かった、見るのはいつも泣き腫らした目をした顔と、痛みを耐える時の顔だけだ。今、小等部の３年生だが、この３年間でカロンの笑顔を見たのは今日で初めてだ。無邪気で裏の無い笑顔、俺に対して偽善じゃない笑顔をしたのはカロンとジーニアスだけだ。カロンはシングルマザーなのと、ジャッポーネ（日本）人の母親とこの国の父親とのハーフであるという不利な状況で貧しい暮らしをしていることは耳にしたことがあるが、もしかして……

「こいつあの路地裏の店で働いてる……って思っただろ？　あの店のことはさっき調べたけど、あそこの店長雇ったアルバイトに暴力奮うので有名何だって。でも、雇う人の条件が広くて、給料も結構いいから、辞められないらしい。もちろん、プライマリーも働ける条件の中に入ってるよ。」

俺の思っていることと、知りたかった情報をジーニアスが一気に言ってくれた。用事というのは本当に用事だったんだ……服を着替えに行っただけじゃなかったみたいだ……
でも、その事なら俺も知ってる。そこの店長は自分のストレスを他人にぶつけるタイプらしく、奥さんにＤＶをしていたらしいが、奥さんに逃げられてからこんな店を開いたそうだ。
そして、殴りすぎて殺してしまった事もあるらしい。
しかし、店長は言葉を巧みに使い、正当防衛で片付けられてしまい

二ヶ月で釈放された。『悪意が無い殺人は罪に問われない』それがこの国の法律であり、常識である。
この店長の事も不幸な事故として片付けられた。店長はそれに懲りずにまだ、人に暴力を奮っているのだから、虫酸が走る。
そんな店に関係がなかったとしても、その周りをこいつはうろうろしてるって事はやっぱり、こいつあの店で働いてるんじゃ……

その時、“う～ん”という唸り声を出しながらカロンの目がゆっくりと開いた。
その目は部屋の蛍光灯の光を眩しそうにしながら薄く開いた。
そして、俺達の姿をその緑がかった瞳に映した瞬間、飛び起きた。
基、飛び起きようとした、だ。痛みで顔を歪ませながら枕に頭を落とす。そりゃ肋骨が折れた体を無理矢理起こそうとしたら痛いに決まっているじゃないか。痛みから額に脂汗をにじませながら肩で息をし、カロンは痛みを抑えながら、首だけこちらに向けた。

「ここどこ……天国か？」

まぁこの大豪邸の中の医務室だからな……
目が覚めて庶民が一番最初に思うことだろう……それに、こいつは庶民よりもしたの貧乏人だから余計にそう思うだろう。
しかし、ここは天国でも地獄でもない、現世だよ。少し俺たちとは次元の違う世界だけどな。

「いや、ここは俺の家だよ。天国だったら俺達まで死んだ事になるだろ？」

ジーニアスはサラリと明るくそう言うが、誰がどう見ても天国に見えるほど豪華だ。

カロンはジーニアスの家だと聞いて周りを見渡した。恐らく俺と一緒で自分の家との違いに、絶望を感じているのだろう……カロンが自分で無理矢理体を起こそうとしていたのでジーニアスと二人でカロンの体を支える為にカロンに近づいた。
その時に改めてカロンがさっきどういう状況だったのか知りたくなった。切り傷、擦り傷、打撲、捻挫、骨折……それ以上に体が細い。三食食べれる生活じゃないのは知っていたが、こんなに痩せていてよく、あの毎日の訓練に耐えられるな……
脇腹を擦りながらカロンはこっちを見た。確かに黒色に緑が混じった変な色をしている。カロンは俺が目を見ていると分かると目を細めてあからさまに顔をそらした。
その時医務室にノックの音が鳴り響いた。ジーニアスが“入れ”と偉そうに言うと使用人がワゴンに食事を乗せて医務室に入ってきた。ワゴンが入ってきた瞬間美味しそうな料理の匂いが医務室中に広がった。匂いだけで唾を飲み込むほどシーフードの良い匂いがする。使用人がワゴンから出してきた白いクリームスープとパンは、俺達庶民が食べているスープやパンとは格が違った。

「夜分遅いので、粗末な食事になってしまいましたがどうぞ。ホタテ貝のクラムチャウダーとロールパンです。」

これで粗末な食事……ジーニアス、いつもはどんな食事をしてるんだ。カロンに同意を求めようとしたが、あまりにショックだったのか目が点になっていた……これは当分立ち直れないぞ……

「カロン、食え。」

ジーニアスはそう言ってカロンの膝にお盆を乗せた。カロンは自分の膝に乗っている料理をどうすれば良いか悩みながら助けを求める様に俺を見た。俺に助けを求められても、俺もどうすればいいか分

からねぇよ……
だから少し卑怯だがカロンからゆっくり目をそらした。ジーニアスはカロンにスプーンを渡して“食え”と強く言い聞かせる。
「いや、でもこんな高級な料理食べれないよ。それに、ホタテってなに？」
その発言にそらした目を思わず戻してしまった。こいつ、ホタテも知らないのか……まぁこいつの家は山の中だから海の幸は……って知らないわけないだろ！　名前ぐらい聞いたことあるだろ、どれだけ貧しいんだよ。
「ホタテは……そうだな～蜆の親戚だ。」
違う！　大きく何かが違う！　蜆は淡水だから、ホタテは海水だから！　って俺も何か論点ずれてる。ジーニアスもこの無知のバカに変なこと教えるな！　こいつ、恐らく素直にそのことを信じ続けるぞ！
「遠慮はいらないから、食べろ。ホタテも蜆も貝だ、そう変わらない。ちょっと大きさが違うだけだ。」
変わるよ、めちゃくちゃ変わるよ。まず値段から大きく違うから、出鱈目言ってんじゃねぇ！　カロンが信じたらこいつが恥をかくぞ！　心の中でツッコミをすませ、カロンを見るとカロンは申し訳なさそうにスプーンを受け取り一口スープを口に入れた。
その瞬間、カロンはびっくりしたのか目を見開いて、それから何かにとりつかれたように皿にかじりつくようにスープとパンを食べ進めた。数分して、全て食べ終えたカロンは笑顔でこっちを向いた。

「美味しかった、ありがとう。こんなちゃんとした食事久々だ。」

こっちを向いたカロンは俺達に今まで見たこと無いような満面の笑みを浮かべてそう言った。久々の食事か……本当にこいつまともな食事してなかったんだな……こんなガリガリになるほど食事をとってなかったのか。

「おい、久々って……お前飯食ってるか？」

ジーニアスの質問を聞いた瞬間、さっきまでの笑顔が一気に消えた。何も言わず、じっと俯くカロンにしびれを切らせたのか、ジーニアスはカロンの細い腕を掴み顔を近づける。

「言え、今まで何があったか、あのレストランとはどういう関係か全て洗いざらい話せ。」

ジーニアスはそう言うとカロンの腕を離してゆっくりと椅子に座った。

座ってからカロンを視界から外さずにカロンが話し出すのを待ち続けた。俺も、ジーニアスの横に椅子を置き、話し始めるのを待つ。こいつに何があったのか俺も知りたいし、今後の対応の参考になるだろう。静かに待っていると、俯きながら静かにカロンは口を開いた。

「父さんが死んで3年経って、さすがに母さんの稼ぎだけでは二人分の生活費は養うことはできなかったんだ。食事も朝ご飯を食べれれば良い方なぐらい、本当にお金がなかったんだ。だから、俺が働いて少しでも母さんの負担が減ったらと思ったんだけど、俺みたいチビのなプライマリーを雇ってくれる店なんてそう無くて……で、たどり着いたのがあのレストランだったんだ。そりゃ、良くない噂

があるのも知ってたし、プライマリーを雇ってくれて、あれぐらいの給料をくれる店なんてそうそう無い……だから、学校が終わった後あの店で働いてたんだ。」

静かで少し低い声でそう話し始めたカロン瞳はとても悲しそうだった。

しかし、瞳を濡らすことは無かった。父親が死に、母親と二人暮らし、お金も無くて、あんなところでバイトって、どんな波瀾万丈な人生だよ。それで無くても学校であれだけ苛められているプラス、バイト先で暴力受けて、おまけに栄養不足ってこれ以上に最悪な事があるだろうか。

ふとカロンの腕に目をやると、カロンの手首になにやら刃物で切った後のようなものが残っているのが見えた。俺がそれを見たのをカロンは分かったのか、カロンは手首を手で隠して一回とぎれた話をまたカロンは話し始めた。

「今日はさ、ちょっと運が悪かったんだよ。いつもはこんな事無いんだよ。今日はたまたま店長の機嫌が悪くて、その時に俺、物音を立てたりしたから。だから……その……怒れただけだよ。」

そう言って、指をポキポキ鳴らしながら俺達と目線をそらした。その目は恐怖の色に染まっていた。

物音を立てただけでこんなんになるなんて、やっぱりあの店おかしい。それに、こいつだってそんな理不尽な理由で思うようにされているのは悔しいはずなのに、なんでこいつは何も言わないんだ……

ジーニアスは椅子から立ち上がりカロンを上から見下ろす。

「怒られた？　怒られるのレベルを超えてるだろ。殴られて、骨折られて、ゴミのごとくゴミ捨て場に捨てられて。それが怒られる？怒られるってのはこういう事を言うんだよ！」

そう言ってジーニアスはカロンの頭に思いっきり拳骨を喰らわせる。あまり力をいれてないとはいえ、さすがにボロボロの体には痛いだろう。カロンは頭を押さえて涙目になりながら、

「何すんだよ！？　痛いじゃんか！！」

そう当たり前のことをカロンはジーニアスにつっかかる。突っかかったときに大きな声を抱いたので、肋骨に響いたらしく脇腹を抑えてうずくまった。

「あ～良い音したね。」

自分は関係ないような発言をして、パンを袋から出し、口にくわえる。カロンもつっかかるのはいいが、ジーニアスになにを言っても流されるだけとわかっていながらもつっかかる。ジーニアスは上からカロンを見下ろしたままつっ立っている。

「そりゃ痛いだろうな、怒るっていうのは最低でもこの程度なんだよ。あの店の怒るは犯罪に近い。」

ジーニアスはそう言って静かに椅子に座り直し、俺を見て顎でカロンの方を指した。俺からもなんか言えってか？　まぁ言いたいことはだいたいジーニアスが言っちまったからな。俺は口に入っていたパンを飲み込み、椅子から立ち上がりカロンの包帯が巻かれた頭を鷲掴みにし、自分の方に近づける。

「お前あの店で働くの止めろ。殺されちまうぞ。」

俺の言葉を聞いてカロンは目を反らし小刻みに瞳が揺れる。光の当

たり具合なのか、瞳が今は緑色一色に見える。その緑の瞳を俺はどこかで見たことがあるような気がした。

「それは……出来ない……」

カロンは小さな声でそう言い、鋭い目付きで俺を睨んでくる。どんなに屈辱的な事をされても、ムカつく事があっても、ずっと薄く開かれた目をして流していたのに今のこの目は獣のような目をしている。

「今、あの店を止めたら母さんの負担が大きくなっちゃう。だから止めるわけにはいかない。」

自分に言い聞かせるような口調でそう言うとベッドから足を下ろし、顔をしかめながら立ち上がろうと足を踏ん張っている。ジーニアスが椅子から腕を組んだ姿勢で“何をしている？”とカロンに問う。

「家に帰る。こんなに遅かったら母さんも心配してるだろうし。今日は本当にありがとう。」

カロンはそう言って笑うと包帯だらけの体をふらつかせながら、椅子にかかっている自分の服をひっつかんで医務室のドアへ向かっていく。

右足が折れているのにこんな無茶して歩いたら治るものも治らなくなってしまう……カロンを止めよう立ち上がるがその前にジーニアスが口を開いた。

「その心配はない、さっきお前達の家に使いを出しといた。あと数分したらお前の母親が来るはずだ。」

そう言うとジーニアスはコックが入れた紅茶を飲んだ。ジーニアスの言葉を聞いてカロンの顔が青ざめたのが分かった。今カロンが青ざめた理由が俺には分かった。
俺の知っているカロンは、無口で不器用、それだけど根は優しくて誰かのことを思ってる奴……その優しくする対称は主に母親だ。その母親にこんな怪我するようなバイトをしていると知られたらいやだろう……カロンはゆっくりと歩いてきてジーニアスの胸ぐらを怪我の少ない左手で掴み顔を近づける。

「何でそんなことすんだよ！　母さんにあの店でバイトしてたことバレちまったじゃねぇか！？　どうしてくれるんだよ！？」

カロンは血相を変えてそういうと膝を折って崩れた。やっぱりだいぶ無理をしてたらしい……
必死に左手で脇腹を抑えながら踞る。ジーニアスは掴まれた時に乱れたワイシャツを直し、カロンの前にしゃがむとカロンの肩に手をのせて静かに話始めた。

「すまなかった……でも、事が事だからな、流石に親に連絡をしなければならないと思ってな……」

ジーニアスの言ってるかとはもっともだ。自分の息子がこんな怪我していたらどんな親だってビックリするだろう。しかも、こいつの様子だと親には何も言ってないようだ。
その時、廊下から足音が聞こえてきたと思ったら直ぐに扉が開いた。扉の前には長い黒髪を一つに束ね、エプロン姿の女性が息を切らしながら立っていた。

「カロン！？」

女性はそう叫ぶと床にしゃがみこんでいるカロンのもとへ小走りで駆け、カロンに抱きついた。カロンは痛みから少し顔をしかめたが同時に少しビックリした顔をして抱きつく女性の腕を掴んだ。どうやら彼女が例のカロンの母親らしい。

「何があったのこんなボロボロになって……」

カロンの肩を掴んでカロンに向き合う母親の目には涙が溜まっていた。カロンはそんな母親から顔を背け、指をポキポキ鳴らしながら、言いにくそうに目をキョロキョロさせていた。母親はそんなカロンから目を離さずにずっと見続けた。

「カロンのお母さん、恐らく本人からは言いにくいと思うので、俺からお話します。」

ジーニアスが言い出した。カロンの母親は視線をカロンからジーニアスに移した。その目からは大粒の涙が流れていた。それもそうだ、自分の息子がこんな夜遅くにこんな傷だらけでいたらそりゃびっくりするだろう。

「カロンは路地裏の小さなレストランで働いていまして、そこは雇う条件や給料がいいのですが、そこの店長が暴力を奮う人なんですよ。カロンはそこで奴隷のように働かされ、暴力を受け、今日挙げ句の果てにゴミ捨て場で倒れているのを俺達が発見しました。」

ジーニアスは坦々と話すと、みるみる母親の顔から血の気が引いていくのがわかった。カロンはまだ顔を背けて下を向いたままじっとしている。母親はそんなカロンの方に向いてカロンの頬を持って無理矢理自分の方に向けて話始めた。

「カロン、なんでお母さんに言ってくれなかったの。カロンはバレないようにしてたみたいだけど、毎日怪我して帰って来てるのも、学校で虐められてるのもお母さん知ってるんだよ。でも、あなたが言ってくるまで待ってたのよ。お母さんはお金やご飯なんかよりカロンに普通に暮らして欲しいのよ。あなたこの3年、ちゃんと笑ったのも泣いたのも見なくなったじゃない。カロン、もう無理しないでいいから、普通の子供みたいに楽しく笑って、悲しいときは泣いてるのをお母さんに見してくれればいいのよ。」

母親の言葉は今まで苦しんでいたカロンにとってはとても重く、そしてとても優しい言葉だった。

父親を亡くしてから、ずっと無理をしながらも働き、母親の為と思いながら痛みも苦しみも屈辱も必死に我慢し、溜め込んでいた。

だが、母親はカロンに溜まっていた全てを一瞬で消してしまった。

苦しみが消えた心に残ったのは、喜びと解放感、そして安心感だ。

カロンは母親の言葉を聞き、今まで溜め込んでいた物を涙として流した。声を出して泣いているカロンを母親はしっかりと抱きしめ、優しく髪を撫でる。母親に抱きしめられ泣いているカロンは、嗚咽しながらも小さく“ごめんなさい”と繰り返していた。

「なんでカロンが謝るのよ、謝るのはお母さんの方。ごめんね、カロンには辛い思いばかりさせてしまって……こんなんになる前にちゃんと話をすれば良かったわね。」

母親は泣きじゃくるカロンを抱きしめながら少量の涙を流した。そんなカロンを見ながら安心をしていた俺はジーニアスの言葉に引っ掛かった。

「ジーニ、さっき“お前達の母親”って言ったよね……じゃぁ俺の母親にも使いが行ったの？」

カロンの家より俺の家の方が近いのに、カロンの母親が先についたって事は俺の母親は俺を迎えに来る気がないっと言うことだ。まぁこんな夜遅くにお使いをさせるような親だし、俺とは犬猿の仲で馬があわないのは知っていたが少しながら期待をしていた。あれでも母親だし、少しは気にするはず……

「あぁ、使いを送ったがお前の母親は“歩いて帰らせてください。”と言われたらしく帰ってきたよ。そんなことより、お前今この感動的な場面でそれ言うか？　タイミングというものを考えろよ。」

あっさり期待は壊されてしまった……あの母親、本当に俺の事を思っているのか？　思っているはず無いか、俺もあいつのことが苦手だし、恐らく母親も俺のことをどうしたらいいか分からないのだろう。だから、お互いあまり関わらないことにしている。

「そうだろうと思ったけど、しょうがないな。っと言うことで、俺の家まで送ってくれ。」

ジーニアスはそう言うと露骨に嫌そうな顔をしてため息をついてこっちを見た。このまま送ってもらわないと夜の道を一人で帰らなければならない。それだけは阻止しなければならない。

「しょうがないな。まぁもともとカロンを家まで送るつもりだったしついでとして送っていってやるよ。」

ジーニアスは大きくあくびをしてから召し使いに車を出させるように言う。カロンは泣いた目を擦りながらジーニアスの前に立ち、“ジーニアス……くん”と小さく言いながら俯く。

「ジーニで良いよ、それに礼なんていらないよ。俺達がやりたいようにやったんだから。」

そう言ってジーニアスは俺の胸ぐらを掴んでゆっくりとドアの方へ歩き出す。俺は引きずられながら下を俯いているカロンを見ると、カロンは何かを決心した様な顔つきで俺達を見ていた。

## カロン・エファト　３―５

「次の問題は、リラクスト君解いてみて。……リラクスト君？
リラクスト君！　起きなさい！」

その怒鳴り声を聞いて目を覚ました。
教科書の影に隠れて寝ていたのに、あのジジィ何で俺ばっかりに目がいくんだよ……ゆっくり頭を上げて自分の席の前の奴に答えを聞いて答える。ジジィはまた五月蠅い声で授業を進め始めた。
あれから三日経ったがカロンはこの三日学校に来ていない。
窓際の席をちらちら見てみるがいつも真面目に受けている小さい背中が無かった。
皆勤賞を狙っているのか、っというほど学校を休んだことが無いカロンが三日も休んだのだ、クラスの女子も少しざわつき俺に何で休みなのかを何度も聞いてきた。
答えたいのは山々だが俺も知らない。あいつの家に行きたいがあんな山奥まで歩いて行くのはごめんだし、電話をしたいがあいつの家は電話が無い……そして、俺とジーニが今はまっていることは……

「あぁ～誰かさんのせいでカロンが三日も学校に来ない。誰かさんがカロンを虐めるから……」

休み時間になると、グリードの机に行って二人でこう呟く。
俺は半分冗談で言っているが、ジーニはオーラーが本気なのを物語っている。
グリードは身を縮め俺らの言葉を聞いている。俺らはグリードの机に座り、椅子に足を乗せる。教室の空気が少しだけ重たくなっているが、そんなこと気にしない。

実際グリードのせいかどうかは分からないが、この怒りをどこかに持って行かなければ頭がいかれそうだ。グリードもこの前の件で俺らを怖がってるみたいだし、なにも言わずにじっと座っているだけだ。

こいつは格好つけるつもりでカロンに突っかかったのだろうと思うが、逆に女子に敵を増やしてしまった。この前の件で女子にカロンファンが増え、ストーカーが急増した。そんなカロンが三日も学校に来ていない、女子からしたらグリードに恨みを持っている人も多い。

「っでグリード君、何にも言わないけど、どう思ってるの？」

ジーニの言葉にブルッとしたグリードはゆっくりと口を開いた。その時……教室のドアがゆっくりと開いた。その影は小さく見覚えのある人物だった。

「あれ？　ジーニにブレイン、どうしたんだ？　グリードが固まってるぞ。」

まだ包帯だらけの格好で教室に入ってきたのは今、話になっていたカロンだった。傷でボロボロになり包帯だらけで松葉杖をつきながら片手で鞄を持ったカロンはきょとんとした顔で俺達を見ていた。

「どうしたと聞きたいのは俺達の方だ、この三日間学校休んで何やってたんだ？」

ぴょこぴょこ松葉杖で歩きながら窓際の席に行き座る。歩くのもしんどいのだろう。そりゃそうだ、打撲、切り傷、擦り傷、捻挫、そして肋骨が二本と鎖骨、右足が折れていたのだから……

でも、その傷跡はこの三日でだいぶ消えていた。どんな治癒能力な

んだよ……

「一日目は傷が熱をもって母さんが学校に行っちゃ駄目って言ったから行けなくて。昨日今日は病院とかいろいろ手続けとかで休んでた。」

カロンはそう言って大きなあくびをしながら鞄の中から教科書を取りだし机の中にしまう。
カロンの前の席にジーニアスが座り、俺はカロンの机に軽く腰を掛けてカロンの話を聞いた。
話によるとカロンはあのレストランを辞めて、今は新聞配達をしているらしい。母親は母子家庭の手当てを受けて少しはお金に余裕ができたらしいが、やはりまだ生活は苦しいのだろう。
虐められていたことや、暴力を受けていた事は親が学校と話し合って少しずつだが解決していくらしい。これで、教室の虐めも無くなるだろう。女子の人気も高くなったカロンは、少しずつみんなにも心を開いていくだろう。

「良かったな、これで学校にも気楽に来れるな。これからも仲良くしようじゃないか。」

ジーニアスはそう言って少し微笑みながらカロンの頬をつまんでのばして遊んでいた。それを見て俺もカロンも自然と笑みがこぼれた。
俺とジーニアスとカロンは今回の事がきっかけで意気投合し仲良くなった。その日から3人でよくつるむようになった。そして……今、こうやってミドルの町の軍隊本部、カラーに3人で入っている。

＊＊＊＊

「っでなんでそんな夢見たんだ？　なんが入院中そんなに俺達に会えなくて寂しかったのか？」

「違うわ！　なんでそうなるんだよ。それにいつ夢を見るなんて分からないだろ……」

カロンはそう言って俺の方にむき直して少し微笑んだ。
今見ても、その笑顔は※セコンダリー、いやプライマリーの時から全く変わってない。少し声変わりをしてほんの少しだけ低くなっただけで見た目も中身も変わってない。童顔の顔に低い身長、テンションが高く、思考は小学生高学年で止まっている餓鬼。でも、その小さな背中にはいろんな影を背負っている。※（中学生）
俺は“そうか”と言ってカロンの笑顔に微笑み返しゆっくりとカロンの横に立つ。そこから見える町の景色はとても綺麗だった。

「カロン、今日の軍事会議お前でない方が良いんじゃないか？　ほら、まだ怪我も完全に治ってないし、熱だって……」

カロンの額に手を当てると、普通より少し体温は高かった。脂汗をかいて、まだ肩で息をしている状態だ。こんな状況で仕事をしていたら、そりゃ気分が乗らないわな……カロンは俺の手をはらって顔を背ける。

「俺は平熱が高いの、だから大丈夫。俺は会議に出る。そろそろ戻らないと部下に怒られる。」

そう言ってゆっくりと廊下を歩き出す。
その後を追うように俺も歩くが、カロンの方が足が短いからすぐに俺が追いつく。廊下を歩いて尉官が仕事をする部屋にたどり着いた。

カロンは何も言わずにその部屋に入り消えていった。俺はこれからどうするかを考えながら扉の前で立ち止まっていた。その時……

「あれ？　リラクスト代将。どうしたんですか、こんなところで。エファト大尉なら先ほど気分が悪いと言ってどこかへ行きましたが……」

グレイ少尉が大量の資料を持ったまま少しきょとんとした顔をして立っていた。

カロンなら今入っていった事を伝えるとグレイ少尉はとても嬉しそうな顔をし、俺に一礼をしてから部屋に入っていった。

あいつ、カロンを尊敬しているのは分かる、でもそこまで喜ぶことか？　グレイ少尉の後を追って尉官フロアに入ると、小さなソファーに寝転がっているカロンを見つけた。

その横に資料を持ったグレイがカロンになにやら話しかけている様子。そう言えばグレイ少尉ってカロンにボールを投げてとせがむ犬のようだ。ジーニアスももうすでに部屋の椅子に座って紅茶を飲んだいた。そんなとき、急に扉が開きこの軍内では見かけないほど小さなお客さんが入ってきた。

「カロン・エファト大尉さん！　こんにちわ～」

部屋に入ってきたのはこの間の内戦でカロンが助けたという少女ハーネスだった。

入ってきたと同時にソファーに座っているカロンに抱きついた。体を起こそうとしていたカロンはバランスを崩しソファーに寝転がった。

「ハーネス！　だっけ……どうしたんだこんな所まで来て。」

カロンは驚いた顔をしてハーネスを抱きかかえると体を起こした。ハーネスはにこっと笑ってからカロンに抱きついた。カロンはハーネスを抱きかかえ、慣れた手付きでハーネスをあやす。確か、カロンはハーネスぐらいの年の従妹がいると聞いたことがある。それで慣れているわけだ。

「あのね、助けてもらったお礼をしに来たの～大尉さんにはいっ！」

っとハーネスは鞄から箱を取り出してカロンに渡した。その箱を見るとどこの国の食べ物なのか、英語では無かったため読めなかった。でも、パッケージの絵からチョコレートなのは分かった。カロンはハーネスにありがとうと頭を撫で、微笑んだ。ハーネスはカロンを気に入ったのか、カロンに甘えて離れない。そんなハーネスは少ししたら帰ってしまい、疲れ切ったカロンだけが残った。

「やっぱ餓鬼は餓鬼に好かれるんだな。そう言えば、さっきハーネスがくれたチョコレート食べようぜ。」

「誰が餓鬼だ！　俺は餓鬼じゃねぇし。まぁ、しょうがねぇチョコレートは頂こう。」

カロンはチョコレートを持ってきて机に置いた。俺達もみんなでそのチョコレートをつつく。
食べた瞬間口の中にウイスキーの味が広がった。これはお酒が入ったチョコレートだったらしく酒が好きな俺にとってこのチョコレートはおいしいものだ。
ジーニアスやカロン、グレイ少尉もおいしそうにチョコレートを頬張りながらジーニアスの紅茶やグレイ少尉が入れたコーヒーを飲み、少しの休養をとる。そんなとき、カロンの顔がみるみる赤くなって

いくのが分かった。もしかして、いやもしかしなくても……

「カロン、酔っぱらってる？　こんなチョコレートで？」

「酔ってねぇ～よ。でも、なんか世界がぐるぐる回ってる様な気がするんだけど～」

そう言えば、こいつ酒に弱いんだった……弱いっと言うより駄目だったんだ。

酒を一杯飲ましただけで倒れてしまうほどの酒の弱さだ。こいつの唯一の弱点だ。大学を出たこいつが一度帰ってきた時に飲ましたらヘロヘロになってしまったこいつにいろいろと質問したら、ぺらぺらと答えてくれた。酒を飲むとこいつは歯止めがきかなくなるので自分の思っている事をぺらぺら喋ってしまう。しかも、その喋った記憶がないと言う全く都合のいいことだ。だから、何か聞き出したいときはこいつに酒を飲ませて聞き出すのが一番だ。

「カロン……もう寝ろ。そんな状態で会議にも出れないだろ……」

カロンをソファーに寝かすとすぐに寝息を立てて寝だした。この早業、こいつだから出来る技だ。

さて、邪魔者は消えた事だしさっさと会議室に行くか……

「今回の議題は、本日欠席のカロン・エファト大尉の中佐に昇任させるという事です。前回の内戦でも、これまで出た戦いでトップの頭を取っているのはほぼ全てが彼の働きです。これだけの働きをしていれば昇任させる理由も十分かと。」

大佐の発言はもっともなことだ。カロンは戦となると人が変わるから、誰よりも強い。しかし……

「断る。あいつは大尉で十分だ。」

ジーニアスはそう言って机に脚をかける。そう、カロンが一年以上ずっと大尉でいるのは俺とジーニアスがこうやってあいつを上に上げない様にしているからだ。あいつならばもっと上に上がれる実力がある。しかし、俺たちはあいつを上に上げたくない。他の隊たちはジーニアスがそうやって言う理由を聞きたがっている。

「だって、あいつが上に上がってこれ以上仕事が増えたら俺たちの仕事があいつに回せなくなる。そうなったら俺たちが困る。だからこの議題は終わり。つまりこの会議も終わり、俺はもう帰るぞ。」

そう言ってジーニアスはゆっくりと会議室を出て行った。俺もジーニアスの後を追って大きなあくびをしながら出ることにした。これ以上罵声を聞きたくないし、こんな堅苦しい会議に出てられない。会議室を出るとジーニアスが廊下の壁にもたれかかりながら待っていた。俺が来るとジーニアスはゆっくりと歩いていった。待っていたと言うことは、ついてこいということだろう。

後をついて行くと明らかにフラフラしながら歩いているカロンを見つけた。まだ酒が残っておいるのか、いつもならキチッとしている軍服もゆるゆるになっている。そんなカロンを見ているとさっき軍事会議の話題になった男とは思えない奴だ。そんなとき……

『カロン・エファト大尉様、ロビーにお客様がいらしております。』

放送でそう呼ばれたカロンは頭を左右に振り、酔いを覚ませれからゆるんだ軍服を直してからゆっくりと廊下を歩いていった。歩いているカロンをグレイ少尉は見つけカロンの後をついて行った。カロンにお客なんて珍しい。人付き合いが苦手、というか、人が苦手のこいつに客なんてよっぽどの物好きらしい。おもしろそうだから見に行くことにしよう……

ロビーについたカロンは受付の女性に尋ねてどこに座っているかを聞き出す。どうやら三番の待合室にいるらしく。頭にハテナを出しながらゆっくりと待合室に歩いていく。三番待合室の扉をノックして中をのぞいたカロンの動きが固まったのを見た後俺たちもカロンに近づく。その待合室をのぞいてみると一人の少し小柄で茶髪の女性がソファーに座っていた。カロンに客が来ただけでも珍しいのに、それがまたしても女性となると余計に怪しい……この女性誰なんだろうか？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6892s/

十人十色の軍隊

2011年10月7日16時14分発行